京都北山撮影紀行 ⑪

山野逍遥（さんやしょうよう）

祈りの炎

撮影　北川裕久

松明に火をもらう（春日神社）

目に見えぬ何かにすがり
何かに頼って
生きてゆく人間は
弱い生き物なのかもしれない
その人々の祈りは今こうして
炎となり
天へ向けて放り上げられる
山村の湿った空気に太鼓の音は沈み
打ち鳴らされる鉦の音だけが甲高く
林間の狭い谷間に響き渡る
祈りの炎は放物線を描き
やがて大笠が燃え上がると
クライマックスを迎える
立ち上がる火柱の炎が天へ届くとき
北山の山里に一足早く
初秋の風が吹く

五斗長神社の祈り

左官松上げ（八桜町にて）

季節の実景

撮影　武市通治

盛夏

夏の空

赤目の滝

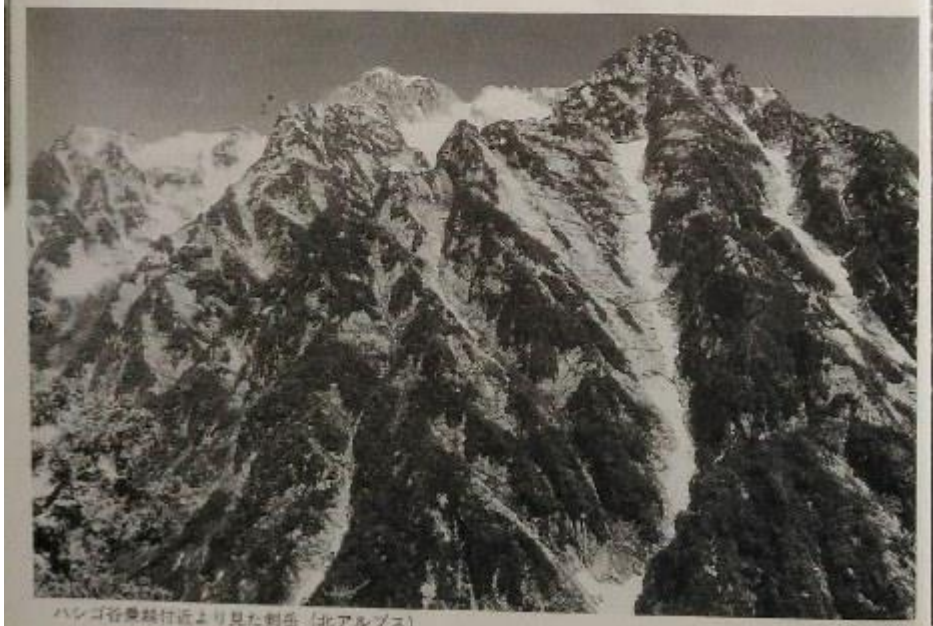
ミソハギ

キツリフネ

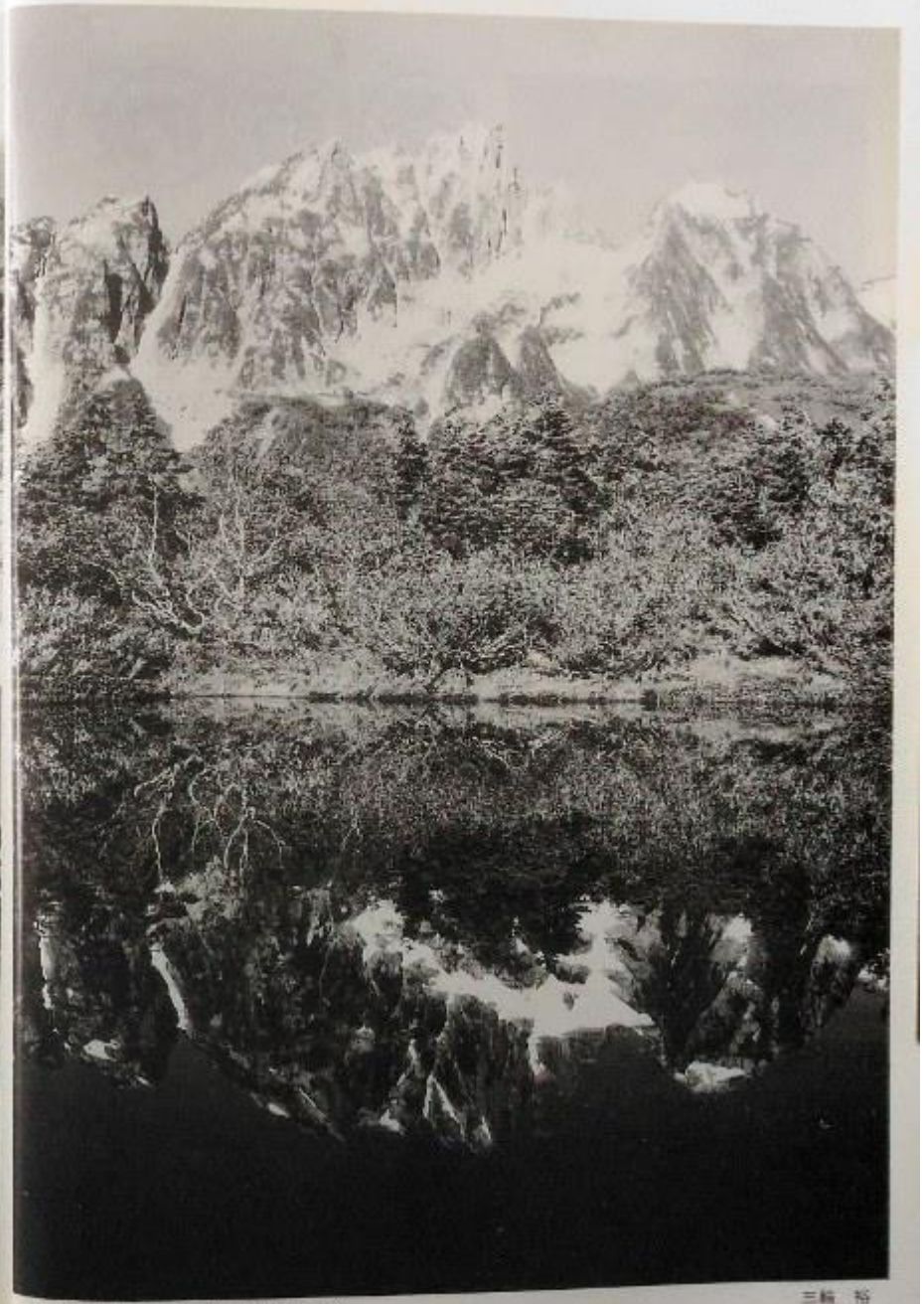
ハス

前頁（初夏号）の花の名称について「トラノオ」は「オカトラノオ」、「ショウブ」は「キショウブ」、「ヒメジョオン」は「ハルジオン」が正しい名前です。

立山別山より剣岳を望む（北アルプス）　三輪　裕



ハシゴ谷乗越付近より見た剣岳（北アルプス）　三輪　裕



仙人池の朝、裏剣を望む（北アルプス）　三輪　裕

●目次

表紙:松田敏男「塩見岳より悪沢岳・荒川岳を望む」(南アルプス)

●作家プロフィール●1949年、京都市生まれ。京都市立芸術大学中。1987年より山岳取材。山谷西の制取多数関催。(京都宇宙博覧、南アルプス林水小屋、他)京都山と渓に関しし委代表、日本山岳会会員。一等三角点研究会員

●グラビア 京都北山撮影紀行⑩「祈りの滝」……北川 裕久
季節の実景(盛夏)……武市 通治 4 2

随想(山のエッセイ)
宿題の山……内田 嘉弘
矢ガモに思う……慶佐次盛一
リュックの中身……稲垣いつを 12 10 10

紀行
白山・尾添尾根を歩く……高雄 潔
芦見谷から竜ヶ岳……前中 毅 16 13

連載 日本盗山紀行9 弥山
甲斐駒黒戸尾根から早川尾根へ……浅野 孝一 20
サクラグチ……松田 敏男 23
弥山・八経ヶ岳・釈迦ヶ岳縦走……内田 嘉弘 28
連載エッセイ・京都北山ほんまのはなし5……西井 賢治 30
京都北山・やぶ満き痛快山行記(10)……北川 玲久 34

特集
第21話杉林のモンスター……34
第22話足尾谷の釣り人……35
第23話長治谷作業所の犀……36
第24話土中から聞こえる話し声……37
第25話野田畑峠の怪音……38

●文学歴史探訪ハイク⑩ 女人禁制・山上ヶ岳……松永 重一 44
京都北山グループ 41

コースガイド
1 飯盛塚山……高嶋 礼尚 50
2 伊吹山北尾根……酒田 啓司 52
3 御神山……慶佐次盛一 54
4 鳥帽子山……児島 弘幸 56

●アウトドア・ライフ入門⑪「新素材雨具新潮」……二名 泉日
●たのしい山歩き・尾瀬雑考⑩「地名と言葉」……松下 満 48 26

1〜10号総目次……59
沿線ハイキングガイド……62
せせらぎ……64
サービスチェーン……64
新ハイ関西山行計画……66
バス時刻(台湾)……70
編集後記・広告案内……72

巻頭言

本誌には「せせらぎ」のコーナーがあります。東京の『新ハイキング』誌のこのコーナーには毎号10ページにわたって、会員投稿、約50名分の山行報告や感想を満載しています。それでも、毎号とても人気が高く、時にはボツになる原稿もあるそうです。わずか20行の記事ですが、これが結構、山のちょっとした最新情報を得るのに好都合です。

関西版のほうはと言いますと、毎号2ページ、5〜6名の方を載せていますが、今までボツになったものはありません。紀行文やコースガイドのような長文を書くのが苦手の人でも、わずか20行(400字)程度のものですから、気軽に書けると思います。

山から帰宅後のひととき、今日の山歩きの楽しかった思い出や印象に残ったことなど、また新しい情報などありましたら書いてみて下さい。

『新ハイキング』は会員諸様の自由な文章を中心に誌面作りを致します。どしどしご寄稿下さることをお願い致します。

夏山シーズンを迎え、事故のない山行を祈っています。

新ハイキング関西(代表) 村田智俊

自然を歩く仲間です。

THANKS 25th AFTERSPORTS
本気でやります。
25周年特別バーゲン 7月20日(火)まで
25年に一度の超お買い得バーゲン
お客様へ感謝の気持ちをこめて、超お買い得商品が盛りだくさん!

OD BOXオリジナル
レインスーツ¥19,800
カラー:ブルー、グリーン サイズ:S・M・L・LL 素材:クロロプレンゴムライトウェイトナイロンコアテックス 口輪/表面:ナイロン、中間層:コアテックス、裏面:ナイロン

リ・ノースフェイス
レインスーツ¥30,000
カラー:ライトネイビー、グレッシュカーキ、スプリンググリーン サイズ:S・M・L・LL 素材:ライトウェイト コアテックス 口輪/表面:ナイロン、中間層:コアテックス、裏面:ナイロン裏糸。襟口、ウエストに完全シームリンクシステムを施してあるコアテックスレインウェア。羽織が使いやすいパッケージのレインウェア。

ご来店の際、新ハイキングクラブ・メンバーズカードをご提示の方には、
OD BOXメンバーズ価格でご提供。

※この他、OD BOXには一流メーカーの登山ウェア、登山靴、サックなどが勢揃い。皆様のご来店をお待ちしております。

遊 衣 休 食 CAMP 住
自然で暮らす。
OD BOX

アウトドアライフのトータルショップ
OD BOXのコンセプトは「自然と遊ぶ素敵生活」
自分の好きなことで自然とふれあう。「登山」の楽しさを通して、もっと自然と仲良くしたい。OD BOXはそんなハートを持つ、一年中アウトドアのお店です。
通信販売でもお求めになれます。お気軽にお問い合せください。(四季・天気・他)

フロアが変更してさらに見やすくなりました。
4F サイクル カヌー
3F テニス ランニング用品
2F キャンプ登山用品 アウトドアウェア
1F バッグ アウトドア雑貨
B1 ダイビング用品

OD BOX大阪店
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-10-31
TEL06(212)9666
定休日/第3水曜日
営業時間/AM10:30〜PM8:00
日・祝日AM10:30〜PM7:00

宿題の山

内田　嘉弘

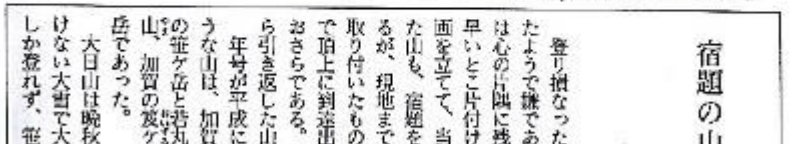
登り損なった山は、宿題を残したようで嫌である。このような山は心の片隅に残ったままになり、早いとこ片付けてしまいたい。計画を立てて、当日雨で中止になった山も、宿題を残したようではあるが、現地まで出掛けてその山に取り付いたものの、何らかの理由で頂上に到達出来なかった山はなおさらである。特に山頂を見ながら引き返した山はその感が強い。

年号が平成になってからこのような山は、加賀の大日山、奥美濃の笹ケ岳と若丸山そして猿ケ馬場山、加賀の笈ケ岳、湯北の武奈ケ岳であった。

大日山は晩秋だったが、思いがけない大雪で大日山遭難小屋までしか登れず、笹ケ岳は早朝から雨で取り付けず、雨が止んでから取り付いたため時間切れ、若丸山は沢を一本間違えたため、山頂が遠くなってしまい失敗、猿ケ馬場山は雨で残雪山止まりで諦めた。笈ケ岳は雪不足と天候悪化で山毛欅山の少し先から引き返し、湯北の武奈ケ岳は、新雪のラッセルで時間を取られ赤岩岳で断念した。

ヒマラヤ登山を見ても、失敗または断念した山に執念を燃やし続けて何回も挑戦していく隊が多い。その執念とまでは行かないものの、失敗または断念して登り損なった山は、大事な宿題を抱えたようなものである。

幸いにも、これらの私の宿題の山々の内、大日山、笹ケ岳、若丸山、笈ケ岳、武奈ケ岳は失敗してから一年以内に登ることが出来た。しかし、猿ケ馬場山だけが一年以上経って中年の昨年中に登るつもりでいたが、まだ登ってないから、宿題を抱えたままになっている。



矢ガモに思う

慶佐次　盛一

東京の石神井川で、矢が突ささったままの鴨が見つかって、日本中を騒がせたのは今年の冬のことだった。懸命の救助の手を、抽獲されると勘違いして逃げ回り、やきもきさせられたのは皆さんも同じことであったろう。幸いにも無事に保護され手当てを受け、再び仲間の群れに放たれて一件落着となった。

手当てをする際に撮影した矢ガモのレントゲン写真には、散弾の散弾が認められた。ご存じのように鴨は狩猟対象となっている鳥で、狩猟禁止区域外では、狩猟期間中であれば狩猟には問題はない。矢ガモの体内に残っていた散弾も、おそらく狩猟禁止区域外で被弾したものであろう。

随想 —山のエッセイ—

私は狩猟には詳しくないが、狩猟期間中であれば、鴨を矢で狩猟することも許されるのであろうか。もし許されるとしたら、ねぎカモならぬ矢を背負ったカモが現れても少しもおかしくないのだが。矢ガモにささっていた矢は明らかにゲーム用の矢で、心ない者がゲーム感覚で動物虐待のために矢を放ったとしか思えない。

矢ガモのレントゲンに写った散弾の痕跡を認めても、可哀相だと思った人はおそらく少なかったであろう。矢ガモが金網から注目を浴びたのは、背中にささった矢であった。あの背中の上から下へ貫いた矢を背負い、不自由な身体で餌をあさり、異様な格好で飛び歩く矢ガモの姿が、私達の視覚に強烈に映ったのである。

矢ガモ騒動の中で、私はしきりに山頂に残された登頂標のことを考えていた。登頂の記念に、登頂標を残す気持ちは分からぬではない。しかし、登頂標が多く残されている山頂は概して誰でも登れる山が多い。山頂には山名を示した標識が一つあれば充分だが、それ以外にゴミでしかない。

登頂標の中には、立ち木に釘付けされたものもあり、立ち木の幹に太い針金でぐるぐると巻かれたものもある。動物だけではなく、植物も生きているのだ。針金で巻かれてくたびれた幹は、矢ガモのついでに嘲られた首に紐がつけられたままの白鳥のことを思い起こす。立ち木に登頂標を釘打つことは、それこそ矢ガモそのものの姿と同じではなかろうか。

矢ガモは動物だから動けるし、それがテレビなど映像の格好の対象となって私達の視覚に訴えることもできたが、動けず、ものも言えぬ樹木は誰に訴えるのであろうか。やがては樹勢が衰えて、枯死を待つだけだ。自然を愛し、緑を愛さなければならないハイカーが、こんな残酷なことをしてもいいのだろうか。私には樹々達のうめき声が聞こえてくるようだ。

私達が歩いている山の殆どは他人さまの所有地で、そこに生えている植物も他人さまの所有物である。立ち木に登頂標を釘付けしたり、針金で固定することは、他人さまの所有物に傷をつける行為で、必要以上の登頂標は他人さまの所有地をゴミで汚す行為であろう。

宝生火山帯の二本ボソ、倶留尊山は、ハイカーが山を荒らすという理由で、昨年から山の持主が入山料を徴収するようになった。二上山も同じ理由ですでに入山料を徴収している。ハイカー達のちょっとした不心得が、山の持主に何らかの対策を考えさせることになる。どうしても登頂記念を残したければ、写真や登山ノートに記録を残せば済むことであろう。植物の盗掘、空缶やゴミの放置はもちろんのことだが、無神経な登頂標のありかたに対しても、今後新たに入山料を徴収する山が増えるのではないかと私は憂えている。せめて新ハイキングの会員だけでも、乱暴な登頂標は残さないようにと願っている。

随想 ―白山のエッセイ―

リュックの中身

稲垣　いつを

泊まりがけ山行の場合、できるだけ荷物を少なくしようと苦労する。テント、シュラフ、コッフェル、これだけでも結構な荷だ。もう既に無理のきかない年だから、最近は専ら日帰り登山である。麓の宿を基点にすれば、一日で登って下れる山はいっぱいある。利尻岳も宮の浦岳もそうして登った。

衣食住の住を除けば、リュックは一気に軽くなる。そうなるとこんどは余計なものまで詰め込みたくなる。昼食時、相棒たちとのリュックの中の品定め、まさに楽しからずやである。

山の先輩で、チョコレートとV・S・O・Pをいつもリュックに忍ばせている人がいた。自分でつまみ飲む以上に、人に勧めるのを楽しみとしている大人だった。マッターホルンのヘルンリ小屋でこの二つを出された時はさすがに驚いた。恥しいことに数年前の冬亡くなってしまわれた。若人早逝という言い方があるかどうか、いつまでも忘れられない人である。

ボクの周囲には様々な個性がうごめいている。バードウォッチングの双眼鏡を手放さない奴。小休止の度にアノラックのポケットからミニスケッチブックを取り出す奴。自称野草学者、自称昆虫博士学者、自称昆虫博士等々。登山そのものが趣味というのもいるが、別の趣味のために山に登るという人間も多い。そんな仲間のリュックの中を覗くのは実に楽しい。ところで、彼らが共通してリュックに忍ばせているものが一つある。10ヤード前後のミニ水筒である。もちろん中身はお茶ではない。ワインであったり、梅酒であったり、灘の生一本であったり。どうしてボクのまわりには、百薬の長を愛する人間がこうも多いのだろう。

ところで我がリュックの中身だが、ミニ水筒なんかはもちろん忍ばせてはいない。年代ものの飯盒が一つ。その中身は、戦線慰楽中の逸品、小振りの珠茶茶碗が二つと、小振りの茶筅、小振りの茶杓。飯盒の中ふたはまんじゅうを入れるのにちょうどいい。

山頂の岩に座しての一服、山笑う登頂での一服、梵の一服、郭公の一服。なんとぜいたくな一日ではないか。せっかくの休日に山に疲れに行くなんてという友人がいるが、なんとかして彼に、山頂での一服を飲ませることが、目下の課題の一つなのである。

白山から一里野温泉へ

尾添尾根を歩く

高雄　潔

白山

白山の主峰御前峰の北方に、標高2530mの四塚山がある。手取川上流の白山下から西に向かうと一里野温泉がある。ここから尾添尾根を南に辿ると、四塚山に達する。

まだ残雪が山頂部を覆っている4月に、白山を南から北に向かって縦走し、一里野温泉のと流にある岩間温泉に下ったことがある。この途中、四塚山から北に延びる尾添尾根が真っ白に輝いていた光景が印象強く残っている。

信仰登山の頃の史跡も残っている尾根であるが、昭和の初期に廃道になったと聞いていた。何年か前に、一里野に至るこの長い尾根上の登山道が、再び歩けるように整備されたことを耳にした。

今年の夏、8月も中旬になってしまったが、このルートを歩いてみようと、今年中学校一年になった娘と二人で出掛けた。

8月14日、JR野洲駅6時2分発の電車に乗る。友人の居民の家族四人と偶然乗り合わせることになった。それも同じ白山登山で初日は同じコース、別当から入り南竜ヶ馬場の予定である。昨日が雨で今日に登山を延期したのだそうだ。いい仲間ができた。

JR北陸線の福井駅から九頭竜川に沿って走る京福電鉄に乗り換えて勝山駅で下車した。ここからはタクシーで分岐を越え、手取川上流の白峰村に入り、さらに別当まで走る。

ほぼ1時間30分走って、別当の登山口に着いたのが、11時30分。少し時間は早いが、小屋で小休止にして昼食をとることにした。まだ天気はしっかりとは回復していない。昼食後、一家族六人で登り始める。

甚ノ助小屋に着いたのが午後1時20分。この辺りまで登ると、木の背も低くなり、感じの良い風景が目の前に広がる。大きく崩壊した柳谷の滝の上に南竜ヶ馬場の緑の台地、さらに雨には別山がゆったりと座っている。充分休んでから再び歩き出す。

午後2時40分に南竜ヶ馬場に着いた。ここはいつ来てもいい所だ。谷から尾根の斜面にはアオモリトドマツの濃い緑。風の吹き抜ける沢にそって風にゆれるチシマザサのうねりが続く。足元には、可憐な高山植物の咲く草地など、小高いこの場所から一望できる。

沢に架かる橋を渡ったテント場には、四～五張りの先客がある。少し下った所にM氏

長坂の下りより尾添尾根を望む

の家族四人とテントを二つ並べて今日の泊まる場所にする。風が強いのでテントの中に入ると、ほっとする。外が薄暗くなる頃に夕食のカレーライスができる。食後は寝袋に入って明日のコースの確認をしている間、娘は隣のテントに遊びにいく。しばらく賑やかな笑い声を聞いているうちに寝てしまった。

8月15日。今日のコースは歩く距離が長いので、空が白らみ始める頃起きて、食事を済ませ6時には歩き出した。M氏の家族は、白山の主峰、御前峰を往復した後、南にある別山から千蛇谷を下るコースをとるので、ここで別れ私たちは先に出発した。

沢を渡り小屋の横を抜け、トンビ岩に向かって登り出す。今日の山は雲の中、霧のために景色は見えず辺りは濃霧としているが、足元の高山植物を眺めながら高度を稼ぐ。トンビ岩を越えたところで雪渓が残っていた。その下からは冷たい雪解け水が流れ出している。顔を洗うと気持ちがいい。霧が濃くなり、着ている服に露がつく。今日は残念ながら頂上からの展望は期待できないようだ。

頂上直下の室堂には7時20分に着く。小屋泊まりの人が出発の準備に忙しそうに動いている。霧がなくなるのを期待して待つ間に、小屋でぜんざいを注文した。

しばらくして出てきたお椀の中には、小指の頭ほどの小さなお餅が二つ申し訳なさそうに浮いていた。期待はずれの大きさと、今朝食べたラーメンに入れたお餅のほうが大きかったので、思わず二人とも顔を見合わせた。

「お餅を出して入れようか」と、雪子もにっこりしながら言う。それでも寒かいお椀に満足して箸をつける。

時間が経っても周辺の霧は消えそうにないので、頂上の西側を巻くコースをとることにし、七倉山に向かう。娘も中学一年になり、学力もついたようだ。自分の荷物の他に食料を持ち元気に歩く。

夏草に露がついているので、歩き出すとすぐ足元が濡れてきた。人影がない岩と霧の花漂たる風景の中を北に向かって歩く。現界はないがときおり霧に濡れた足元に花が輝いて見える。娘に時々立ち止まって「お父さん、この花が綺麗、止まって」と、手に持ったカメラで写真を撮りながらついてくる。

七倉ノ辻に3時30分に着いた。ここが尾瀬尾根の入り口にあたる分かれ道。霧のために周りが全く見えないので地図を拡げ、磁石で方向を確認する。ここからが始めて歩く道。なが年山登りをしていても、初めてのルートは新しい発見の期待に気持ちが高まる。

四塚山は小さいお椀の広がった頂みに、石を積んだ塚が幾つか並んだ平坦な山頂であった。ただ霧が北西の風に乗って通り過ぎていく。風に乗って変化する霧の濃淡と、薄い光の中で刻々と移り変わる辺りの風景は、一瞬夢の中にいるような感覚にもなる。賽の河原とはこんな空間なのかと想像をめぐらす。一人だと迷って通り過ぎるかも知れない。そんな中をわずかな踏み跡が薄く続いている。

長坂の急な坂を一気に標高2300m辺りまで下ると、雲の下に出た。風は強いが、霧も晴れ展望がきかだした。歩く人が少ないのか、這い松が絡み合っている踏み跡を進む。

感じの良い尾根上に加賀室跡のピーク、奥美倉山の稜線がなんとも言えない濃い緑の曲線を描いて北に続いている。少し開けより高くなった這い松と岩間の陰で昼食にした。こんな岩間の陰にタカネマツムシソウが薄紫の花をつけ風に吹かれていた。

ここから少し下ると油池に出る。湿地が幾つか点在する湿原の中、背の低いトドマツの間に静かに水をたたえている。水辺には小さい紫色の花が咲いていた。開放感のある広々とした高原だ。雪子は「つぎはお母さんと一緒にこよう、きっと喜ぶよ」と、このあたりの景色が気に入ったようだ。

ここから2158mのピークに登り、さらに加賀室跡を越える。往時をしのぶ石積みはすでに苔に覆われて自然に帰っている。爽快な尾根までは、緑の絨毯を敷きつめたような清浄ヶ原の展望を右手（東）に眺めながら歩く。足元にはハクサンコザクラがピンクの花を咲かせていた。

湿原の空にはトンボが群れ飛び数知れず舞っている。一歩ごとに足元が割れるように小さい昆虫が羽音を立てて左右に飛び立つ、こんな光景の中を歩いていると、何か忘れていたこころよい記憶を甦らせてくれる。

疲れも、こんな山歩きができたことを心に残

しておいてほしい。こんな事を思いながら歩いていると、つい歩く速度が遅くなる。「お父さん何してるの！」と、呼ぶ声に慌てて歩速をあげる。元気な子だ。

美女坂の手前で、百四丈の滝が遠望できる展望台に立ち寄る。清浄ヶ原の水を集めて一気に落ちる水信は、涼しそうな水煙を上げ、轟々と谷一杯に音を響かせながら、深淵に吸い込まれている。

朝歩き出した時、今日歩ける距離は、患長倉山避難小屋辺りまでかな、と考えていた。その小屋に着いたのが午後1時3分。狭い尾根から一段東に下った、切り開いた所に小さい小屋があった。手桶ちの水も一杯程度になった。ここに泊まるか、一里野まで下るか相談する。娘は「一里野まで降りよう」とまだ元気である。

ここから長倉山を経て一里野までは大きな高低はないが、歩いても歩いても道は続く。二人とも無口になって黙々と先を急ぐ。

やっと一里野スキー場のゴンドラ乗り場に着いた。朝6時に室堂を出発してから10時間、20kmをこえる距離を歩いてきた事になる。

バス停まで歩き時刻を確認したが、もう金沢に出るバスはない。テント場を探しながら、再び石間温泉方面に歩く。30分程歩いた沢にテントが張れる場所を見つけた。

冷たい沢の水で足を拭いていると、自然が豊かに残る湖待を越えるコースであったこともあり、満ち足りた気持ちいっぱいの一日であった。ぜひ初夏、花がたくさん咲いている頃再び訪れてみたい。

次の日。一里野に戻り、今日一番にでる11時3分のバスまで温泉につかり、前の芝生広場でひとときを過ごす。ここもトンボの天国だ。芝生に寝ころんで手を上げると指に四匹も五匹もとまって休憩する。広場近くの店でお土産を買って帰途に着く。

（平成4年8月14日～16日歩く）

《参考タイム》

（8月14日）JR野々市駅6・02—福井—京福電鉄勝山駅8・40（タクシー）湯涌11・30—芋ノ助小屋13・20—猿ヶ馬場14・40（テント泊）

（8月15日）猿ヶ馬場6・00—室堂7・20—七倉ノ辻9・30—油池11・05—奥長倉避難小屋13・05—一里野16・30—バス17・30（テント泊）

（8月16日）一里野11・03—鶴来—JR西金沢—JR野洲駅

《地形図》 2万5千—白山・新潟温泉・白峰

昭文社『43白山』

京、北山独りある記

芦見谷から竜ヶ岳

前中　毅

京都北山

五十路を幾つか越えてから、ちょっとしたことをきっかけに山を歩きはじめたのだが、来月のお盆で丸一年になる。生来の怠惰者に加えて足が遅いので、基本的には単独行だ。フィールドは北山のみで、比良も六甲も知らない。たまには違う山域にと思わないでもないが、まだ北山の入口に立ったばかりなので、あと5年ほどは北山の『褪色の薄明』を求め続けようと思っている。地図ができないのでガイドブックの情報や、道標とか色テープに頼るだけの我流の悲しさで、それこそはじめの頃は、その日の目的地に達せずに何度も無念の思いをした。二ノ瀬ユリや雲母坂、大原や八瀬の山々、あるいは雲ケ畑からの峠などにせっせと通って経験を積んでいるうちに、北山の渋さのようなもののとりこになってしまった。

昨年10月に傾斜の急登から峠床の三角点に立つことができた。それを機に体力・精神力両面で、ささやかながらも自信が生じてきた。と同時に目標を見つけた。それは、地図に山名が記入してある京都府の900㍍峰を全てクリヤーするというもので、三角点の有無は問わない。今のところ日帰り山行しか無理なので天狗峠だけは対象外とし、目標は十三座で、今日の竜ケ岳（921㍍）は九番目のターゲットだ。

JR八木駅からのバスで越畑に9時過ぎに着いた。鉢巻の締め直しと簡単なチェックをして9時10分芦見峠に向かう。集落の家々の間を縫うようにして、細い舗装路がかなりの急勾配で峠へと導いてくれるのだが、すぐに左後方に眺望があり、鎌ケ岳が堂々とした山容を見せている。

この峠道の中程までは、猛烈な急流が奔り下る細い側溝があり、越畑の鍋山と呼ばれている高度差のある田圃に水を供給している。標高400㍍の高原の山里の発祥は、平安期とのことで、先人の知恵と努力が鍬田や用水路を今日に残したのだろう。道は地道になり、緑の葉をいっぱいつけた小木がその両脇を固めて、褪色の地面とのコントラストが鮮やかだ。前方が明るくなってきたので、間もなくだろうと汗も拭わずに登り詰めた所が芦見峠だ。

芦見峠は一ケ月ぶりだが、あの時には峠の道端に、ササユリが咲いていた。清楚なすピンクの花の美しさに魅せられて、私はその時点で芦見峠を"百合の峠"と名付けた。"百合の峠"は広葉根の鞍部で、桧と松と雑木の

竜ヶ岳山頂

混合林で、能笹が下に密生している。静かな落ち着きと、明るい安堵感を合わせ持った良い峠だ。

汗を拭き、半袖シャツを長袖の細シャツに着替え、写真を撮ったりして6～7分の休憩で出発。地蔵山への登山口を右に見て、直進する峠道を乗り越す。緩やかに下って行くと、すぐ右手の笹の中に細い道があり、今日のコースはこの道を行く。落ち葉が敷きつめられ平坦でよく踏まれた山のプロムナードだ。自然にとけ込んだような、こんなにいい道を歩くと気分も盛り上がってくる。左はるか下方が芦見谷で、林道が沿っている。晴れた日で昼いのだが、適当に谷から風が吹き上がってきてありがたい。

この快適路を20分ほど来たころから、小さな谷が何本か右上から降りてくる。そして所々で道が極端に狭くなっているが、慎重に歩けば問題ない。やがてめずらしく岩場を通り、小谷を渡って高巻く。そのピークが分岐で左へ。谷に降り立った所に〈流谷出合〉の道標がある。岩の間を急流が白泡となって降りてきて、地蔵山の東で生れた流れが豪快に合流する。流谷に架かる木橋を渡って芦見谷の右岸へ。

芦見谷の源流部分は5月に歩いたが、生え込みがきつくて荒れている。当然歩きにくい。樹相は中小木の自然林だったように記憶しているが、新緑の季節だったのに印象が薄い。しかし、ここからの中流部は北山全域でも屈指の美渓とのことで、勇躍として谷を遡行する。すぐに右へ左へと徒渉の連続で忙しい。水量が多くて、徒渉地点の足場になってくれる石がほとんど水面下に没している。結構立派に防水スプレーをしたことが生きてくる。白い飛沫が岩や倒木にまき散らし、周囲の樹林の新やかな緑と飛び交う鳥のピーッと鋭い鳴き声などが調和した芦見谷の渓相は、文句なしに一級だ。

谷間が広く明るくなり、涙ぐましそうな深い淵を通り過ぎて、徒渉を繰り返して遡行をして来たら、右手から芦見源流が降りてきた。当然地図の真下からの谷と、竜の小屋の横からの谷とが合した谷が、ここで芦見源流と合流している。左岸へ渡った所は狭く、それに夏草が生え込んでいて分りにくいがここが分岐で、芦見源流を愛宕裏まで突き上げる道に入り、すぐ右にこれからアタックする竜ケ岳の登り口がある。流谷川合いから芦見谷遡行は徒渉に手間どり芦見峠からここまで一時間半かかった。写真や汗拭きで二、三度足を止めたくらいでノンストップで来た。

ザックを下ろし、足を伸ばして休憩。初めてお茶を飲む。本日のハイライトはここからで竜ケ岳への急登に備えて、キャンディーやチーズを食べるが、効果はどんなものだろう。

11時25分、竜ケ岳山頂を目指す。木の根の露出する暗い樹林の急登に取りつくが、両手両足をフルに使って四つんばいのような姿勢

竜ケ岳付近略図

で登る。正面に待つ大岩の左へ回り込み、岩の中腹を右に下ってまた左へ登る。芦見渓流が左下から水音を届けてくれるが、目を向ける余裕はない。もう一度右へ登って左へ鋭角に切り返えすようによじ登って大岩の上に出た。もうこれだけでも汗が吹き出す。次は急斜面の直登が壁のように眼を圧する。とにかく息つく暇がないとはこのことで、厳しい急登、険しい岩場とで緊張が解けない。左右のふくらはぎが張ってきたが、それだけ足に負担がかかっているのだろう。15～16分も頑張っただろうか、シャクナゲの群生地を通り過ぎて左下方に奇岩を見る。愛宕方面から眺める竜ケ岳は、穏やかな断線の征山で、裏側にこんな険しい岩場と急坂を持つとは想像もできない。だが竜ケ岳との命名の訳が理解できたように思うのだが……。尾根に上がったのかちょっと緩やかな道になり、東が開けて近くの山々が見渡せるが、この地点よりも高い山は無い。檜林の長くて辛い直登を登り着いた所が岩の狭い台地で、左右の斜面にシャクナゲが群生している。さすがに疲れた。小休する。

流い息がおさまったので、さあアタック！1分ほどでピークに乗り、やや下り気味に右へトラバースして、こんどは左へ折り返してまた急登になる。4～5分間もがくように登って主稜らしき場所に登り着く。左右共に樹間からの見通しが良くなり、ぐっと緩やかになった。2分ぐらいで竜ケ岳の山頂に到達した。時計は正午を指す。

暑い、北側の僅かな木陰にシートを敷き、休憩基地にする。

衣類を取り替え待望の昼食だが、その前にお茶をぐーっと。うまい、ありがとう！これしか言葉がない。一息つくと、何物にも替えがたい満足感が、じわっとこみ上げてきた。竜ケ岳に初登頂だ。

山頂は小広場で、せいぜい10人ぐらいしか座れない。眺望は東が全開で、京都市の大半と市外の南部もかすんでいるが遠くまで見通せる。東山の山並みが紫色にうねっている。右手から愛宕神社の森が独特の地形で迫り、そのすぐ左に三角点ピーク一帯のガレ場が痛々しく見える。京都から仰ぎ見てもはっきりと見える、典型的な自然破壊の傷跡だ。

13時、愛宕裏への尾根道を南下する。すぐに笹がしのび寄り、藤から葛へ、更に刈ぐらいの高さまで伸びてきて、上腕や胸も笹の海に入り込む。地蔵山の笹原も見事だが、竜ケ岳の南面もそれに負けず劣らずだ。迷いようのない一本道のルートだが、色テープがやたらに付いているし、赤ペンキも多くの木に塗りつけてあり、一種の自然破壊だ。何事にも適度とか、控えめがありがたいのだが……。

だらだらっとピークに着いたら、それこそ息をのむほど広くてきれいな笹原が現れた。後方には、左に地蔵山、右に竜ケ岳が丘のようにこんもりとした姿を見せている。写真撮影の絶好のポイントなので休憩する。愛宕裏林道のT字路へ出る。左折して、東へ進むと林道と分れて左に入る道がある。その道へ入るとすぐに右へカーブで幅3mほどの石だらけの新しい車道になる。そのちょっとした急坂を登りつめた左手の小さな丘に、標名愛宕の三角点がある。890・5mだ。

三角点の設置場所は2～3人立つのがやっとの狭いピークだ。三角点標柱は、通常地中に埋まってる部分がかなり露出していて、こんなのは初めて見た。愛宕採石場はこの三角点の直下までも無惨なガレ場に変貌させてしまった。緑が豊かだったはずの山肌を削って放置している。檜林などして元の地形や植生に近い状態に回復させるという義務は無いのだろうか。

東の眺望がすこぶる良好で、紺碧の夏空の下に京都が広い範囲に見わたせる。比叡山から大文字山を経て、東山の峰々がたおやかに

南下している。報恩寺テル辺りの後方に琵琶湖が見え、大津市やその東方のずっと遠い山々も望める。

雄大な眺望を楽しんでから、首無地蔵へ出発。地蔵の辻を左折、すぐに出合う（高雄道）の道標に従って右下の急坂を下りる。歩きやすい下り坂の尾根道は京都の眺望が良く、しばしば右に目を向けながら進む。昔は愛宕裏参道として栄え、今もハイカーに親しまれている。堂々とした現役の道だ。

愛宕三角点から40分ちょっとで首無地蔵に着く。サカサマ峠とも呼ぶこの峠は、首の無い地蔵さんが「左あたご」と彫字された台座の上に座していらっしゃるのだが、いつの時代にこんな哀れな姿になられたのだろう。東西に長い台地状の峠は、一帯が成樹の植林でうす暗く、道は愛宕、芦見谷、カヤノ木峠、高雄、清滝への五差路になっている。報恩寺の全ての道が集まったロータリーだ。

愛宕三角点

清滝へ梨ノ木谷を下る。この谷道は有名な急坂で、以前に逆コースを歩いたが、私にはとても一気に登れる坂ではなくて、峠に着くまでに何度も休憩した。

峠から20分ほどで自然の小道が林道になった。すぐに右の山裾に、黒っぽい自然石の「梨木大神」の碑がある。

左に水飲み場を見て、粗い籠裏の道を下ってくると林道のゲート。そして月輪寺からの道とそれに隣接した空也の滝への遊歩道を右に見る。大杉谷との出合いだ。ここから荒沢川右岸の植林地を30分ほどで清滝へ。川の瀬音が大きくなり、清滝の橋が目前だ。

愛宕参詣の拠点の清滝は、その昔壮年男巻女が体を清めて愛宕神社へ向かい、またその帰途には土産物を買ったりして、たいそう賑わった宿場町であった。桂屋山高山寺の吉兆の祖で、鎌倉期の傑僧、明恵上人が、

清瀧や瀬々のいわなみ高雄やま
人も風のかぜぎ身にしむ

と歌ったように、奇岩巨石が多い山紫水明のこの地は、今でも京都周辺の観光地だ。

最後の締めくくりはだらだらしないで、手を大きく振り、膝を高く上げて、背筋を伸ばしてハイピッチでバスプールまで歩いた。バス待ちの間に横のお店でビールを飲む。五臓六腑に浸みわたった。ちょうど17時。

（平成4年7月23日歩く）

《コースタイム》

槻畑（28分）芦見峠（45分）滝谷出合（40分）竜ケ岳登り口（30分）竜ケ岳（55分）愛宕山三角点（43分）首無地蔵（33分）梨木大神碑（25分）林道ゲート（30分）清滝バスプール

（地形図）2万5千1京都西北部・亀岡

昭文社「47京都北山1」

○先日（5月5日）、同じコースを歩いてきました。本文記事（昨年のもの）と次の三点に違いがありましたので追記します。

一　芦見谷林道が滝谷出合いより上流（徒歩7分）に延長されている。その上部にも高量用らしき木杭が打ち込まれていたのでもっと延びるだろう。

二　愛宕三角点が取りはらわれていた。

三　三角点ピークの10mほど下に約50mほどの高さの鉄塔が建っていた。

連載

日本霊山紀行 9

弥山（みせん）

1895メートル

浅野孝一

93年4月28日、新宿を夜行バスに乗った。八木駅に着いたのは朝7時少しすぎ、雨が降っていた。

とりあえず近鉄下市口駅までのキップを購入し、橿原神宮前駅で乗り換え時間を利用して朝食をとった。近鉄吉野線に乗るのは以前吉野山へ行った時以来のことで、雨にぬれた新緑の車窓風景の中に当時をよみがえらせる山や川、民家の存在があった。

下市口駅に集まったメンバーは四台のタクシーに分乗した。雨が降ったり止んだりする中を行者還トンネルへ向かって、天川村の山の奥に入ってゆく。車は川迫川渓谷ぞいに進む。新緑の雑木の斜面に山桜の花が見られる。今年は、東屋辺では桜を長期間見ることができた。再び吉野山中で桜を見ることができようとは考えてもいなかった。

川迫川から新引谷に入る車道の橋は閉まっていた。この頃から雨足が強くなってきたので私達は車道を雨具をつけて歩き出した。布引谷の二股の左股にかかるコンクリート橋の下に入って昼食をとった。行者還トンネルの入口も閉められておりトンネル内に入って休むこともできず、雨の中、少憩してから山稜に向けて登山道を登り始めた。

雨が小降りになったのはありがたかったが、考えても見なかった急坂で、私はペーティにおくれがちに登って行った。急登につぐ急登の斜面にはシャクナゲの灌木が多かった。それが笹の斜面に変ると稜線は近かった。

弥山神社（弥山山頂）

二万五千分の一の地形図、弥山・釈迦ケ岳を見るかぎり、いわゆる大峰山の奥駈の山稜はゆるやかな地形を表示しているが、特に今回たどった弥山、八剣山（八経ヶ岳）、釈迦ケ岳への山稜は複雑な地形であって、多くの起伏や岩場がかくされていた。

わずか山中二日間の山歩きから結論を出すのはいささか早すぎるが、私の感懐として昔の奥駈の修験者は途中足の生爪をはがした人が多かったのではないかと思ってみたりした。それほどはげしい起伏の多い山稜であったから。

弥山に向かって歩く、山稜の登山道は霧の中にけむっていた。1600㍍のピークは林の中、二度目の休憩となった。ここは石林の宿跡といわれているが何もない。なだらか山稜はゆるやかに下り、ブナの大木がつぎつぎにあらわれてくる。この辺り、木々の芽ぶきはなく、山稜の平地にはバイケソウの新芽の色が実にあざやかに見えた。

次のポイントは聖宝ノ宿跡で、木立ちの中に理源大師の等身大の青銅座像があった。吉野から熊野に至る大峰山系は、昔より修験道の行者達によって歩かれ、途中に大峰七十五の霊場があり、その霊地のあった地点は靡と呼ばれ、現在その地点には多くの木札等が岩かげや大木の幹に打ちつけられてある。その他修験者達が宿泊した地点が地名としての宿跡である。現在その宿泊所として残されているのは、私達が歩いたコースでは釈迦ケ岳と大日岳の中間にある深山宿の蓮華堂と前鬼の小仲坊である。

聖宝の宿跡を過ぎると弥山への登りとなる。ブナ林の登りは聖宝八丁といわれる坂で、登山道のかたわらに幾基が表れてきた。ブナからトウヒやシラベの林になってもジグザクの登りは続く。

車道を歩き出してから約4時間半、パーティの最後を歩いてようやく弥山小屋に着いた。立派な大きな小屋が三棟あった。雨もあがったので弥山の頂に立ってみた。山頂には白木造りの弥山神社（坪ノ内大河神社奥宮）と小さな行者堂があった。小屋の前から天川川合への登山道が分かれている。山頂の一角に八方眺

弥山付近略図

があるが、そこからの展望は霧のため見ることはできなかった。

『日本山嶽志』は「弥山（別称御山）大和国吉野郡ノ中央ニアリ、吉野村大字吉野山ヨリ十里、下北山村大字前鬼コリ一里二十九町ニシテ其山頂ニ達ス、標高六千三百二十三尺」又『大和志』は「山上嶽より南の方六里ばかりあり、層巒叢薄として山路險しく、所謂御嶽神仙（ミタケジンセン）ともいうも、此ほとりの事かや」と記している。

鎌倉期の歌人西行法師も大峰入りを実施している。『古今著聞集』巻二（西行法師大峰に入り蓮行首打の事）の中で、山伏の先達宗南

登山に必要なものは、
田舎・船来
すべて揃っています。
足にピッタリ！
登山靴のことならお任せ下さい。
〒604 京都市中京区丸太町通烏川東入
☎ (075) 211-5768
FAX (075) 231-0318
山とスキーの専門店
京都 ムラカミ

聖宝の宿跡（理源大師像にて）

坊僧都行宗にさんざんいじめられた事が伝えられている。その時の西行の歌は「大峯の神仙と四所にて月を見てよみける。深き山に住ける月を見ざりせば思ひでもなき我身ならまし」。

私達は三日間、小雨と霧の中を八剣山、釈迦ヶ岳、大日岳を経て前鬼に一泊して山を下ったのであった。山中いたる所でマンサクの花を見た。

（平成5年4月29日～5月1日歩く）

〈コースタイム〉

新宮発バス岐車止（40分）行者環トンネル西口（1時間）石休宿（30分）聖宝宿（55分）弥山（30分）八剣山（2時間30分）樫千宿（2時間30分）宗教ヶ岳（1時間）太古の辻（1時間30分）前鬼口

〈地形図〉2万5千―弥山・釈迦ヶ岳

【会員募集】

山頂間心・峰

誰も知らない、小さな山を

誰にも会わない小さな頂を

登り続けて十数年、道が無くて藪こぎしたり、思わぬ良い道を良い展望に出会ったり。小さなロマンを求めて関西の山を歩いています。毎週日曜日に例会山行あり、参加人員は10人以下。会員数40数名の小さな会です。年齢・経験・性別は問いません。入会希望者は72円切手同封の上、左記事務所へ

〒559　大阪市住之江区南港中二ノ二ノ四四ノ九二三　高橋一郎まで

山と高原地図シリーズ

定価 各2,000円(税込)

1 北アルプス縦断	34 鈴鹿山
2 白馬岳	35 朝日・出羽三山
3 穂高槍・黒部源	36 鼎温山
4 剱・立山	37 鈴三
5 上高地・槍・穂高	38 栗駒・早池峰
6 乗鞍高原	39 八幡平
7 御嶽山	40 十和田湖
8 中央・南アルプス縦断	41 ニセコ・羊蹄山
9 木曽駒・空木岳	42 大雪山・十勝岳
10 甲斐駒・北岳	43 白山
11 塩見・赤石・聖岳	44 雲山・伊吹・鈴鹿
12 妙高・戸隠	45 御在所・鎌ヶ岳
13 苗場高原・草津	46 比良山系
14 軽井沢・浅間	47 京都北山1
15 西上州・妙義	48 京都北山2
16 美ヶ原・霧ヶ峰	49 京都西山
17 八ヶ岳・蓼科	50 北摂の山々
18 富士・富士五湖	51 六甲・摩耶・有馬
19 箱根	52 鳴神高原・二上山
20 伊豆	53 金剛山・岩湧山
21 丹沢	54 紀泉高原
22 高尾・相模	55 奥高野
23 大菩薩連峰	56 大峰山脈
24 奥秩父	57 大台ヶ原・大杉谷・尾鷲山
25 奥武蔵・秩父	58 赤倉・伯耆大山
26 奥秩父1	59 氷ノ山
27 奥秩父2	60 大山・蒜山高原
28 谷川岳	61 四国剣山
29 越後三山	62 石鎚山
30 尾瀬	63 福岡の山々
31 日光	64 九重・阿蘇
32 那須・塩原	65 祖母・傾
33 猪苗代・吾妻・安達太良	66 屋久島

※昭文社の「山と高原地図」は年度版として前年秋頃発行されます。ご山行の際はなるべく最新版をご使用くださいますようお願いいたします。

※昭文社の「山と高原地図」へのご質問・ご意見がございましたら、本社編集部「山と高原地図」担当までお気軽にお電話ください。また新情報等お教えいただければ幸です。

株式会社 昭文社

本社　東京都千代田区九段北4-2-11　電話03(3262)2141(代)　〒102

支社　大阪市淀川区西中島6-11-23　電話06(305)5721(代)　〒532

営業所　札幌・仙台・横浜・千葉・浦和・立川・名古屋・金沢・京都・広島・福岡

樹林と展望のコース

甲斐駒黒戸尾根から早川尾根へ

南アルプス

松田敏男

夏の南アルプスへは比較的よく行く私だが、いまだに黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳に登っていないということが、いつも心の片隅にあった。

以前、七合目小屋へは仙水小屋から往復しているので、黒戸尾根の上部の景色は知っている。しかしこの尾根は、麓からテントを担いできっちり登ってこそ、この尾根にふさわしい登り方だという思いがあった。始点の竹宇駒ヶ岳神社から頂上までの高度差は、2100mもある。これだけの高度差を持っている山は、他にそう見あたらないのだ。もちろん途中の山小屋に一泊しないと無理である。食事などすべて小屋におまかせの準備なら、頂上を越えて向こう側の山小屋まで行けるかもしれないが。

私は京都府城陽市に住んでいるが、隣の田辺まで近鉄で行き、少し歩いてJR片町線で大阪に出た。阪急バスの梅田から茨木野行きに乗るためだ。昼の便しかないが格安であるため、最近はよく利用している。難点は朝のラッシュ時に、大きなリュックを持って大阪環状線や梅田駅をうろうろしなくてはならないことだ。

8時35分、阪急梅田駅の北側にあるバスセンターを出発。阪急百貨店の4つの停留所に寄ったあとは、新宿駅が真近の四谷まで停留所はない。一般国道に出ると、少し進み方が鈍くなるが、14時過ぎに茅野に到着した。JRに乗り換え、韮崎へ。韮崎では一日に数本しかない竹宇駒ヶ岳神社行きのバスに乗るため、ずいぶん待った。

甲斐駒摩利支天より北岳・間ノ岳を望む

バス停に降りると、長い夏の一日とは言え日暮れが近い。下車したのは私一人だけだ。バス停より奥へ林の中の道を進むと、キャンプ場があった。キャンプを目的にした家族のパーティがいくつかテントを張っていたが、賑わいとはまるで無縁の、川の流れの音が林間に響いていた。石のない場所を選び、テン

トを張る。もうほとんど暗くなっていた。管を忘れたことに気づき、キャンプ場の管理人から一個いただいた。この一瞬の著に一週間お世話になろうと思いながら、夕食をつくる。

三食共食事をつくるとしたならば、私の場合はせいぜい四日間が限度である。テント・シュラフ・衣類などに加えて、絵の道具も必要だから、それ以上の食料は担げない。食事の内容をあまり切りつめるのは悲しい。山に登るのは楽しみだから、食事も楽しみの一つとしておきたいものだ。

翌朝は4時30分に起き、6時10分に出発する。竹宇駒ケ岳神社の鳥居の前で左側へ道をとり、尾白川の吊橋を渡る。ここから登山道だ。(関蓮華2190㍍の起点かと思うと気持ちがひきしまる。尾白川渓谷沿登路を右に分けて、山腹をぐいぐいと登り始める。歩き始めは特にゆっくりと、歩きさえしていればいつかは着く、とのんびりかまえることが肝要だ。抜いていく人がいても、人は人、自分は自分というペースを守る。

3時間程登った頃、水地に着いた。これまで自分ひとりだったのに、ここには学生10人ぐらいのパーティが休んでいた。水場のまわりは少しゴミがあって居心地はよくないが、新着とした木立ちと岩場が修験の山という印象を与えていた。ひと登りで横当駒ケ岳神社道に合する。まだまだ先は長い。ゆっくりと悠々を愛でながら進もうではないか。曇り空であったが、霧が出てきて、だんだん深山の雰囲気をかもし出し始めた。あまり暑くなく、歩きやすくなった。深い樹林が切れて岩場が現れる。刃渡りの難所だ。しかし、しっかりした鉄の杭が打たれ、鎖が渡してあるから、何もこわくない。雨に濡れていれば、歩きこんだ岩角は丸くなっていて、すべりやすいだろう。また、深い樹林に入る。傾斜が緩やかになり、少し下ると五合目小屋だった。行く手には垂直に近い梯子がかかっていた。しっかりしているから安心だ。急登を1時間程登ると、七合目小屋に着いた。

早速テントを張る。数張しかなく快適だ。雨が降ってきた。台風が接近しているという。明日は停滞か。休憩してのんびりテントの中でやり過ごすのもいいではないか。翌日は雨の中、テントにひきこもり、深山の呼吸に合わせて体を休めた。台風の通過にもかかわらず、また遠い所で強い風の音が聞こえはしたが、このテント場にはそんなにも強い風が吹いてこなくて、いい雨だった。

一日中完全な雨だと、あきらめていたのに、夕方になってあまりの明るさに外を見れば、青空が広がりかけているではないか。急いで小屋の横の高台に登り、夕日に染まる鳳凰山塊と満月を描いた。

予想通り次の日はよく晴れた。快適に岩をぬって歩く。しっかりとした鎖や梯子があるので、安全な道である。昔からの信仰の山を思わせる石碑などが眼につく。最近の測量で1㍍高くなった甲斐駒ケ岳頂上に着いた。何度も来ていることでもあり、あまりにも人が多いから、すぐに下山にかかった。今回の目的地のひとつ、摩利支天へと向かう。ここは人が少なく、ゆっくりできた。アマツバメがぶんぶん羽音を鳴らしながら中空を飛びかっている。巨岩を前に、ツメクサなどを配して絵を描く。

仙水峠から少し下った仙水小屋に15時に着いた。この山小屋に私の作品が30点程展示されている。CDから流れるクラシック音楽も特徴のひとつだし、何と言っても食事の良さは抜群だ。清潔なトイレには頭が下がる。

翌日仙水峠に登り返し、展望地として最高の黒沢ノ頭、アサヨ峰に登る。これらの峰は南アルプスの全貌中にいるという感概を持つことができる、最高の場所だ。ミヨシノ頭より大きく下るあたりはすでのような樹相だが、登り返した2553㍍地点は、岩が突き出ていてイワギキョウが咲き、北岳の眺めがすばらしい。そしてまた樹林帯に入り、三角点を通過したらすぐに早川小屋だ。

早川小屋付近より北岳を望む

風情のあるいい山小屋だ。おいしい水も流れていて、展山には展望台も用意されている。シラビソを額にしたような中の北岳の眺めは、しみじみとした深い感動があった。

翌日は付近を散歩しながら絵を描いた。のんびりと過ごせる静けさがいい。これでも真夏のアルプスだ。遭難後の朝は大雨だった。しかし平定通り出発する。雨の広河原峠。これがまた実にいい。早川尾根の中で、この辺りが最も山の深さを感じさせる樹林相ではないだろうか。雨の中の高嶺への登りはきつかった。森林限界を越えると一段と厳しくなる。二度目の高嶺、まだ一度も晴れたことがなく、ここからの北岳の眺めはまたお預けだ。

鳳凰岳の登りでは一時身動きができないくらいに強い風に見舞われた。今日は雨模様のため、人気の高い鳳凰山塊に入っても、登山者はめっぽう少ない。砂払岳を下ると樹林帯に入って、ほっとする。

この山荘最後のテント場、南御室小屋に着いた。翌朝は目的地のひとつ、辻山でゆっくり白峰三山を眺こうと思っていた。縦走路の分岐から分かれると、深い樹林の中をさまようような気持ちになった。すぐに辻山頂上に出られたが、この15分程の道程は印象的だった。頂上は突然、木がなくなっており、岩場帯だった。

はじめは濃霧の中に朝霧が光っているだけだったが、次第に霧が沈んでいき、まず鳳凰山塊が見え始め、白峰三山も一山ずつ交代に見えかくれした。このような動きのある見え方が一層印象的にした。2点描き、3時間ぐらい山頂にいたけれども、誰にも会わなかった。

あとは人の多い長い道のりを夜叉神峠までひたすら歩いた。途中、山火事跡付近の花々が美しかった。

(平成4年8月8日～11日歩く)

ヘコースタイム▽尾白川キャンプ場―七合目小屋（7時間20分）　七合目小屋―仙水小屋、摩利支天経由（3点制作して9時間45分）　仙水小屋―早川小屋（5時間30分）　早川小屋―南御室小屋（6時間30分）　南御室小屋―辻山往復―夜叉神峠下（2点制作して8時間20分）

（地形図）2万5千＝長坂上条・甲斐駒ケ岳
5万＝韮崎・市野瀬・鰍沢
昭文社＝「10甲斐駒・北岳」

アウトドア・ライフ入門 ⑪

野外塾

●新素材雨具研究

米良狩人のズザン帽

関西アウトドアースクール
校長　二名良日

いよいよ待望の山開きシーズン到来ですが、西日本の梅雨明けは7月15～16日頃とかで、本格的な夏山はもう少し先のようです。

「梅雨明け10日の好天気」は、アウトドアの嬉しい常識となっていますが、直前の7月上旬は「梅雨の末期雨」といわれています。特に西日本の梅天の特異日といわれている7月5日には、神戸で山津波（1938年）がありました。また夏本番の「大暑」に入っても、「大雨時どきに行う」時節……とあっては、山行計画において雨に対して注意せざるを得ません。

「濡れちゃあダメ！　着がえなさい！」というような「雨ヒステリー」の現代の日本ですが、古来稲作民族ゆえの雨の語彙、擬声語の多さは世界一です。自然を利用した雨具の文化も、蓑・隠れ蓑笠～桐油・柿渋紙～漆～菅蓑笠～股旅合羽……まで、興味津々たる歴史です。ここでは最近注目の新素材を中心に整理してみますので、参考にして下さい。

繊維の織り方による防水の迫真の流れがありますが、最近では、密度・糸の種類・複合糸……と質の違う研究が進んでいます。

ペンタイル――ダイワボウの綿100％の超密度織り。良質のエジプト綿を双糸使いし、水を含むと綿が膨張して、防水・防風性を発揮する。

60／40クロス――性質の異なるタテ・ヨコ糸を織り合わせ、互いの弱点を補強し合う「交織」の代表的な織り方。タテ40％ナイロンとヨコ60％綿のクロス。水に濡れると、ヨコ綿糸が膨張して水の侵入を防ぐ。通気性も良く、耐久性・引き裂き強度も高い。

一本の糸に性質の違う素材を複合的に巻き合わせた二重機織糸―コーヤンの方式。

セラック――ポリエステルの芯糸に、麻と綿を巻いた二重構造糸。乾きが速く、シワになりにくく、洗濯によるちぢみも少ない。

アルゼス――ポリエステルの中心部に、ポリエステルと綿の混紡糸を巻きつけ、最外層を綿でカバーする三重構造糸。最外層の綿が蒸気状の汗を吸収し、中間層が拡散し、中心部が毛細管現象で芯全体に包みこむ。

豊村の「ビニール」カッパや、漁師・ヨットマン愛用の「ゴム」カッパが、防水100％雨具として、一世を風靡してきました。

ハイパロン――ラバー・アクリル・ウレタンの弱点だった日光・オゾン・酸素に耐久性のある、硬化しても破れない合成ゴム。マイナス30度～プラス150度もの温度変化に耐え、成型性もあり、防水性は強力。

シンパテックス――裏地にラミネートし、表地との間に薄膜を作る。無孔膜なので防水・防風性が高く、水蒸気は温熱生理学上有効な程度に通過させる。これらの防水・防風・透湿性はクリーニングでも弱化しない。

完全防水の素材は、体内の汗を封じ込め、そのためにムレたり冷えたりする。外からの雨は防ぎ、内からの汗（水蒸気）は出す、という相反機能の新素材が求められ、開発された。

ゴアテックス――1976年にアメリカで開発された透湿防水新素材の代表。フッソ樹脂加工の超薄フィルムで、1平方センチあたり14億個もの微細孔があいており、その一個の大きさが0・2ミクロン、すなわち水滴の2万分の1、水蒸気の700倍であるため、雨は通さず汗の水蒸気は通す。

ミクロテックス――0・6ミクロンの孔を持つフッソ樹脂フィルムを、基布にラミネートした透湿防水新素材。孔が大きく通気性があり、また孔が由がっているため防風効果もある。熱に強く、寒冷地でも硬くならない。

ウィックコート――湿式ウレタン樹脂コーティング新素材。高分子加工技術により、0・5～3ミクロンの孔があいており、防水・撥水・透湿性を備えている。

エントラント――1979年に東レが開発。ウレタン樹脂75％と、フッソ樹脂25％の液体を発泡させて、0・5～3ミクロンの孔を作り、基布にラミネート。4kg／㎠の水圧にも耐え、防水・撥水・防風・透湿性あり。

その他ユニークな発想の新素材としては、

ブルーフェース――超微細セラミックス含有のポリウレタン系コーティング膜。5～10ミクロンのポリウレタン孔と、0・1サブミクロンのセラミック孔の効果により、高度の防水・透湿性を持つ。

バイオトキン――旭化成が開発した。カニ、エビ等の殻に含まれるキチン質とウレタン樹脂の四層コーティング加工。防水・防風・透湿性の他、吸汗・抗菌性もある。

レクタス――ライジンが蓮の葉をモデルに開発。空気の力で水を撥く撥水と透湿性を持ち、汗や湿気を発散させる。

以上のような素晴らしいハイテック新素材の原理・能書きを信用するならば、夢の繊維一万々ス／で済むのですが、発売時より愛用の我が「ゴアテックス」は、縫目シームテープは剥げ落ち、本体は「吸い取り紙」が現実です。防水「ハイパロン」的なものと、快適「ゴアテックス」的なものの併用が必要です。

これを機会に、お手持ちの雨具の素材点検と研究、情報交換をぜひやって下さい。

京滋百山　三角点を行く（上）（下）
芝村　文治著
四六判　各1200円
三角点のある京滋の山を訪ねるガイドブック。上巻には西山・亀岡、南山城、湖南の50山を、下巻には北山、東山、比良山系の50山を収録する。ポピュラーな山からどのガイド書にも載っていない山まで、アプローチの詳細とその山の魅力、エピソードなど。

ベスト・ハイク
―京滋の山
鈴木　元・綱本逸雄編　1200円
日帰りで行ける京滋の代表的36コースを親切に案内、要好者必携の書。最新の調査にもとづく93年改訂版出来！

かもがわ出版
〒602 京都市上京区烏丸通出水西入　☎075(432)2868

鈴鹿

サルとイノシシに出合った
サクラグチ

内田嘉弘

1986年、最後の山行は鷲岩（803・4㍍）で、野洲川ダムの大河原に車を置き、橋を渡り、田圃を横切ると登り口であった。NHKのアンテナが中腹にあって、そこから秋雪もあり、急坂になった。一気に登ったところで鎌ケ岳が現れ、その鋭さは鈴鹿の盟主を誇っていた。三角点を探すため高い方に向かったが、そこにはなかった。もう一つ高い方だろうかと一番高い所へ登って探してみたが、やはりない。「分からなくてもいいや」と戻って、先ほどの鎌ケ岳のよく見える所でスケッチを終えて足元を見ると、雪を被った三角点があるではないか。三角点は必ずしも最高点にあるとは限らない。鷲岩のそれは最高点の三角のピークに位置しており、ここからは雨乞山、御在所山、鎌ケ岳、水沢岳、宮指路岳など鈴鹿の山々が望まれた。仙ケ岳は前衛のサクラグチに邪魔されて見えなかったが、そのサクラグチは立派な山だ。野洲川ダムを隔てて深く切れ込んだ谷と穏やかな双耳峰からなっており、左のピークがやや高く頂上のようだ。そして、この山もスケッチをして下山した。

その後、水沢岳、宮指路岳、仙ノ岳を登り、サクラグチが気になる山として残ってしまった。

サクラグチ（918・8㍍）について案内または紹介している文は少なく、唯一『近江の山』（笠山啓三著）に出ている。それには、「サクラグチという奇妙な名前の山がある。鈴鹿の南端、野洲川上流域の大河原、鮎河に向かって、県境尾根から大きく突き出した支脈の一峰である。野洲川ダムをはさんで対岸の綿向山塊の鷲岩（803・4㍍）とこの山は、一気にのび上り、寺院の本堂たる鈴鹿内院の県境の山々の人口を守る仁王様のような感じがある。」と出ている。

鷲岩から見たリクラグチ（左がピーク）

その『近江の山』の著者笠山啓三氏に御話を入れて、この山の登山口を尋ね、春分の日に登ろうと計画したが、生憎、用事が重なって中止してしまった。だから、宿題を抱えているような状態が続いていた。

7月1日、天気予報は一時雨と言っていたが、空を見上げると大丈夫のようだったから、家内と一緒に出掛けることにした。国道1号線から土山町役場の信号を左折して、きれいな土山ダムを抜けると鮎河の集落で、ここがサクラグチの登り口である。2万5千分の1地図では、村の中から一本、村はずれから1本、それぞれ点線が入っている。私たちは、村はずれの方を選んでそちらに車を置いた。

道は谷筋に付いているはずだが、入り口で堰堤工事をやっていたから山道が分からなくなっていた。工事現場の作業員にその道を尋ねると、

「堰堤工事の左岸を巻いて、右岸へ渡ると山道がありますよ…」

と教えられ、

「この付近は猿が沢山いてね、この堰堤まで群れをなして降りてくるからね…」

言われた通り堰堤工事の左岸を巻いて対岸へ渡ると山道があった。それは、沢通しに登っており、支尾根に抜けて右に辿ると486㍍ピークの東のコルに出た。この道はコルを跨いで鮎河へ下っている。サクラグチへ向かう尾根筋の杉林の中にも踏み跡があった。人の踏み跡ではなく、動物の足跡のようで、登り口で作業員が話していた猿達のものであろうか。その踏み跡を辿ると杉と背丈大の笹の中の登りとなり、それをかき分けて抜けると、下草のきれいな杉林の急坂になった。ジグザグに動物の足跡が続いており、その動物は、猿の群れで先行しているようだ。登り始めてから小一時間ほどで789㍍ピークのガレ場に出た。正面に今年の初登山をした仙ケ岳を見ながら、一息入れる。

ここから上は、まだ下枝が払われていない若い杉林の中を滑り抜け、鈴鹿特有の透いた

渡木谷に入った。

「ガサッ！」

と音がして前方に猿が走るのが見える。私達がここにいることを示そうと、

「ホー、ホー、…」

と声を出しながら登ると、今度は、リスが前方を歩いているのが見えた。リスと見えたのは間違いでイノシシの子供が三、四匹ちょちょち歩いているのだ。そして、その後から母親イノシシが付いている。私達が居るのが分かっているようで、少し慌てて、小走りに藪の中へ消えてしまった。その後は、動物の足跡もなくなり、再び藪こぎとなって891㍍ピーク（鷲岩から見るとサクラグチは、双耳峰に見え、西のピーク）に登ると木陰が目の前だ。一旦、コルに下って、少しの藪をこいで緩い山頂に出ると、杉林の中に囲れた三角点があった。東面だけ展望が開け、仙ケ岳から御所平への緑の滑らかな稜線が印象に残った。この稜線はまだ歩いてないからいつか歩いてみたい。

（平成元年7月1日歩く）

〈コースタイム〉

鮎河（20分）486㍍ピークの東のコル（40分）789㍍ピーク（30分）サクラグチ西の891㍍ピーク（20分）サクラグチ

（地形図）2万5千分の1土山

大峰

天ケ瀬から大峰奥駈道

弥山・八経ケ岳・釈迦ケ岳縦走

酒井賢治

毎年、梅雨明けに登る夏山の日本アルプスへのトレーニングを兼ねて四年ぶりに大峰奥駈道を歩いてみた。

7月下旬、半木へ釣りに出かける近所のT氏の自動車に便乗し、午前5時半生駒の自宅を出発。国道169号線の伯母峯トンネルを越え山峡を下り切った天ケ瀬に8時頃着く。T氏の半木での釣果と交通安全を祈り自動車を見送る。

天ケ瀬川右岸につけられた林道に入るとすぐ左に行者還林道を分ける。真っ直ぐ林道を歩き橋を渡り左岸林道をゆくと道は二分する。直進に水太谷に沿い無双滝方面へ、行者還岳へは左へ橋を渡り中の股林道を行く。落石が多いため自動車の通行不可とある。途中右の渓谷に行者の滝が20㍍程の落差で堂々と落下しており、近くに新しいログハウスが建てられていた。

さらに進むと右に林業小屋があり左へ林道を分ける。真っ直ぐ幅の狭くなった道をゆき、9時すぎ林道終点の広場に着いた。広場から左へO林業会社の林道が新しく作られていた。

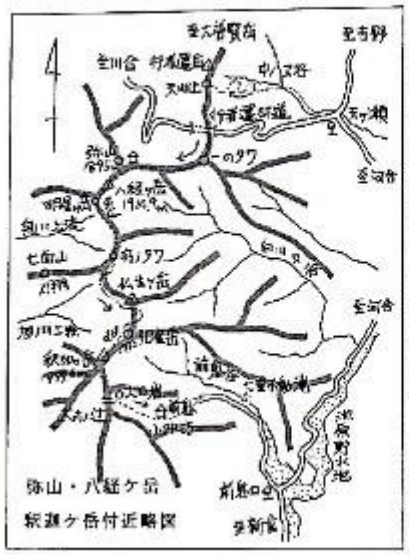
小さな道標に従い行者還岳への山道に取りつく。この山道は大峰主稜から東へくだる清明ノ尾根の支尾根北面山腹につけられ、谷を大きく高巻いている。山腹にからみ前進し高度を上げてゆくと、40分程で左から側谷を合わせ、これを越して薄暗い杉林の中をゆく。やがて取り付きの広場で左に上っていたO林業の林道に出る。この辺り林道の開通によって以前とはすっかり様相が変わり、山深さがなくなってしまった。旧登山道も荒廃し見つからない。仕方なく林道を登る。林道は幾筋を渡り右へ大きく竜光形につけられていた。登るにつれて深い谷を隔てて和佐又山や辻堂山が迫り上り、大台の山々を遠く眺める。1181㍍の鉄塔ピークまで登ると、眼前に行者還岳東面の岩壁や緑の山肌が迫る。

林道はなおも竜光形に続く。途中で小さな「北山越へ」の道標を見つけ、林道と分かれクマ笹の繁る旧道を登ってゆくと、やがて樹林帯となり、11時半頃天川辻（北山越）に着いた。ブナ等が繁る静かな鞍部で、右は行者還岳へ、前方は川迫川方面への下山道だ。ここで昼食をとる。

食後、左手弥山への奥駈道をゆく。潅林の中の小さなピークをいくつも越えてゆく。時折、後方向木立ちの間よりバリゴヤ谷ノ頭から熊村ケ岳の稜線が見える。13時頃一ノタワに達し、左へ行者還林道への下山道を分ける。静寂の中一息入れる。後方遠くからホーッ、ホーッと法螺貝の音を聞く。ここから奥駈道は西に向きをかえる。

1516㍍のピークをからみ緩やかにくだると、まもなく右から行者還トンネル西口からの道を合わす。この道は、最近弥山への最短ルートとしてよく使われているようで、明るい樹林帯の中にベンチが設けられていた。

前回、樹々の間に弥山の巨体を見て前進する。石仏の宿跡を越えると、左に開かれた箇所があり八経ケ岳から仏生ケ岳へかけての大きな山稜をみる。やがて弥山への急坂の取り付き、聖宝の道跡に着いた。聖宝理源大師のブロンズ像が祀られている。ここから弥山山頂までは高度差約300㍍、トウヒ、シラベなどの樹間の急登で山腹をジグザグに大きく登り、15時35分頃山頂に着いた。



楽泊まりの手続きをすませ、お酒と肴を持って弥山山頂で私の最も好きな西見八方眺望の展望所へゆく。暮れてはいるが川迫川方面の谷よりガスが湧き上がり、今日歩いてきた奥駈道の深い樹海が見えたり隠れたりしている。先日二人の命を飲み込んだ白川又谷が無気味に霧の中で見えていた。聖宝の宿跡辺りでひときわ大きく法螺貝の音がした。17時頃小屋へ戻ると、大勢の登山者が山頂を賑わしていた。先程の法螺貝の主は男女20名程の奈良薬師寺の修験者とのこと。吉野からの逆の縦入りで男性は山上ケ岳からの縦走、女性は五番関で一旦洞川に下山し、一泊後行者還トンネル西口からの登頂とのこと。いまだに大峰の女人禁制は固く守られているようだ。この夜、私一人は日山小屋をあてがわれ、他人の鼾を気にすることなく静かな夜をすごした。

翌朝、3時半修験者一行のお経と鈴の音で目をさます。一行はすぐに出発した。日の出までウトウトする。東の空が赤味を帯びはじめた頃起床、今日は快晴だ。国見八方説で日の出を見る。

薄青く朝もやに霞んだ大峰・台高の山々が幾重にもシルエットを重ね、谷は雲海の底に沈んでいる。茜色に染まった雲が遠くたなびき大鵬が昇る。まさに旭日昇天。私はリヒアルト・シュトラウスの交響詩「ツァラトゥストラかく語りき」（映画二〇〇一年宇宙の旅）のタイトル音楽で有名）の序奏を思い起こした。

もち入りスープで朝食後、5時45分弥山出発。トウヒ、シラベ等の樹林の道を白谷宿の最奥にくだり、急坂を登り返し6時15分近畿の最高峰・八経ケ岳に立つ。展望は360度思いのまま。両はこれから縦走する大峰奥駈の主稜線が、遠く釈迦ケ岳までうねるように続き、稜線から東へ延びる幾多の支尾根が白川又谷に下っている。北・東方向すぐ前に樹林に覆われた弥山が大きな山体を横たえ、その後ろに山上ケ岳・大台ケ原山を始め大峰・台高・大台の山々のパノラマが広がる。西方向も遠く金剛・葛城山系のスカイラインや高野・奥高野の山々が波濤のごとく続いて見えた。前方遠く緑の樹海の中に法螺貝の音を聞く。

6時30分すぎ八経ケ岳出発。明星ケ岳は西山腹をからんで通る。この辺りオオヤマレンゲが多いが花弁はすでに落ちていた。樹林と小笹の中、露岩に気を配りながら、主稜西

道につけられた静かな道を上り下りする。横原・[illegible]への道を右に分けると、今ノ川上流[illegible]の深い切れ込みを隔てて七面山が姿を現す。五百羅漢[illegible]を終えると、[illegible]の平地、舟ノタワに着いた。名の通り舟形に見えぬことはない。七面山への分岐は知らぬ間に通過。今夜は三段[illegible]山荘をめざす。途中ザレ場がありザレ石の[illegible]に咲き上げていた。ザレ石の白、樹林の緑、碧天の青色が印象的だった。

さらに岩場を[illegible]終わると[illegible]の尾根に出て、すぐ[illegible]の宿跡に着いた。ここから仏生ヶ岳にかけては、ブナ等の大木の樹林と小笹を敷きつめた明るい緩やかな尾根道で、奥駈コース中の最も好きな所だ。大きな倒木に腰掛け一息入れる。[illegible]色い[illegible]、七面の大岩壁を望む。高差300～400mはあろうか。静寂そのものの中、私は一人[illegible]を[illegible]らす。俗世のことは全て頭から消え去り、ただ大自然の中に身を浸すのみ。

仏生ヶ岳への緩やかな坂を登ると道はまた西面山腹をからみ、回り込むように尾根に出る。

前方、旭の川源流の谷を隔てて釈迦ヶ岳が初めて姿を見せた。[illegible]すぐ前の岩峰の東側をまき、再び幅広い尾根をゆく。この辺り先の岩場で[illegible]なったのか、ブナ等の大木が[illegible]倒れて、[illegible]ていた。次のピーク孔雀岳を[illegible]して、[illegible]に出て孔雀[illegible]に着いた。[illegible]大きく[illegible]、大峰と大台[illegible]の山々が[illegible]谷[illegible]切れ落ちている。[illegible]が[illegible]起立し、深い[illegible]に[illegible]見えた。

ここから釈迦ヶ岳にかけては、岩場の多い険路をゆく[illegible]の核心部で、大から大へと見せ場を[illegible]してくれる。[illegible]から少し登り出した[illegible]で[illegible]。釈迦ヶ岳では[illegible]の声が響き、[illegible]が急峻な山肌を[illegible]見える。「[illegible]・六根清浄……」の声も聞こえる。

1時間ばかりの休息[illegible]。険しい岩[illegible]を[illegible]にくだる。大日の[illegible]を巻き小笹の道を少し登っていよいよ釈迦ヶ岳に取り付く。「[illegible]」と称されるダケカンバの多い急勾配の山道をいっきに登り、13時20分釈迦ヶ岳頂上に着く。修験者一行の姿はすでになく山頂は私一人。[illegible]が迎えてくれた。

展望はさすがに1等三角点、360度全開である。北は孔雀・仏生・七面の山々、そしてその向こうに八経ヶ岳がひときわ高く聳えている。南は近く大日岳を見下ろし、更に天狗・地蔵・[illegible]などの大峰南部の山々が[illegible]と続き、[illegible]山の山並が遠く霞んで見えた。しばらくして[illegible]修行者が[illegible]コースで登ってきた。[illegible]からの人で、自動車による[illegible]ということで[illegible]山上ヶ岳・[illegible]・釈迦ヶ岳には[illegible]の[illegible]に入り、不動小屋谷からの[illegible]に聞いた。[illegible]を写真に撮った後早々に下山。[illegible]あった。13時50分釈迦ヶ岳出発、すぐ不動小屋谷への下山道を分け[illegible]林と小笹の[illegible]。[illegible]大峰修験道の[illegible]に着いた。木立の中の平地で、修験者[illegible]が[illegible]ている。深仙の宿から少し登ると正面に大日岳の岩峰が迫り、修験者が岩峰に挑んでいる。私は大日岳を右に[illegible]し大日岳[illegible]につけられたトラバース道を下山し、14時[illegible]太古の辻に着き一息入れた。大日岳山頂からお経と法螺の音が聞こえてくる。彼らは行場毎に[illegible]修業をするから[illegible]時間がかかるのであろう。ここで私は修験者一行に[illegible]したことになる。

太古の辻から、奥駈道はさらに南へ続くが、[illegible]への道を下山する。

後ろを仰ぎ見ると、大日岳の鋭い岩肌を谷に落ち込ませていた。ブナ等の大木が繁

八経ヶ岳より大峰南部の山々

る急な岩場や岩石のガラ場を横切りくだってゆくと、10[illegible]の高さの二つ岩に着いた。二つの岩の間に登ってみると、深い樹林の向こうに[illegible]から釈迦ヶ岳にかけての稜線と巨大な山肌が見えた。

二つ岩から[illegible]の多い急坂をぐんぐんくだり、[illegible]トラバース[illegible]

[illegible]

翌朝4時半起床。[illegible]れ身支度を整えすぐ出発。まだ薄暗い[illegible]林道への[illegible]の山道を[illegible]くだる。[illegible]5時10分[illegible]

[illegible]

＜コースタイム＞

[illegible]

連載エッセイ

京都北山 ほんまのはなし（その5）

北川裕久

第21話 杉林のモンスター

誰にでも経験があると思うが、ふとしたことで立ち木が人影に見えたり、谷川のせせらぎがしゃべり声に聞こえたり、岩が人の顔に見えたりと、ドキッとするようなことが多かれ少なかれあったと思う。私は、単独行で歩くことが多いのでこのような経験は非常に多い。

その中でも特に驚かされたのは、京北町の千谷山へ登る途中の居根付近でのことである。辺りはあまり手入れされていない杉林が多く、その杉の木に混じって、おそらく台杉の古株が朽ちたと思われるものが、あちこちに点在し、ただでさえ薄暗い杉林の中で、何か異様なまでに大きな黒い化け物がうずくまって、こちらを見ているような、そんな不気味な雰囲気だった。

初めて、この山へ登ったのは、小雨の降る5月中旬で、谷江から北へ延びる谷江谷をつめた。谷の源頭部は荒れ、杉の小枝が無数に落ちていて、何度も足を取られた。

周囲の杉林は暗く、どんよりと霧がかかって幻想的な情景をつくり上げていた。その中で、点々とうずくまるように残されている台杉の切株を見た時、私は熊だと思いドキッとした。しかし、歩きもせず、吠えることもしない。

その黒いモンスターをじっと見ていると今にも立ち上がって動き出し、私に襲いかかるのではないかというような恐怖さえ覚えた。特にその日は、雨で若株が濡れていたため、やけに生き物らしく見えたのも事実だった。

その後もモンスターの並ぶ巻き道を歩いたが、近寄って見ても気味悪く、博物館のミイラのそばを歩いているような気がした。この日は何を見ても、不気味な姿に見え、それ以来、千谷山周辺は歩いていない。

あの杉のモンスター達は、今もあの場所で山歩きの人達に恐怖心を与え続けているのだろうか。それとも私の中にだけ入り込んで邪悪な心を痛めつける山の精木に棲む妖怪なのかもしれない。

私は自分で言うのもおかしいが、他の人より数倍、霊視能力が高いと思っている。今までに不思議な体験をしたことも幾度かあり、北山を歩いていて不思議な出来事に出合ったことも、北山の渓谷で人の霊を見たことも二度ばかりある。

神れた岩が人の顔に見えたりすることは、何度もあり、中でも決まった場所の決まった岩の前を通り過ぎるとき、強い霊気を感じる。

そんなことが私自身、実際に何度も起こっている。

ここにお話した出来事も、そんなふうに考えてゆくと霊視能力の高い私に、山の樹木が何かを訴えかけていたのかもしれない。

それ以上のことは私には何もわからないが、山にも、その日その日の表情があるのは事実。さまざまな表情の山と溶け合うことが私達ハイカーの喜びではないかと思う。

次に、私の体験した不思議な話を何編か綴ってみたいと思う。

第22話 足尾谷の釣り人

私は人より数倍も霊視能力が高いという話をしたが、ある人に聞くと、それは単に視病な性格がそのような現象を引き起こすのだという。

例えば、この谷でとてなった人がいたら、その霊が岩にとり憑いて、岩肌に顔を浮かび上がらせる、などといった勝手な想像をしているうちに、岩が顔に見えたり、谷川のせせらぎが話し声に聞こえたりするのだという。

多分そうかも知れないが、私は実際に、これからお話しするような不思議な怪奇現象に出くわしたのである。

夏になるとよく出かける谷がある。安曇川水系の支流でV字型の渓谷を形成する足尾谷である。北山の渓谷の中でも比較的険しく、それだけに北山一の渓谷登攀を誇っている。

7年程前のことである。足尾谷に血を騒いで、足尾谷に沿って高巻き道をくだった。往復コースで登路に谷の遡行を楽しもうと、足取りはいつになく早まる。途中にはシャクナゲの密生する居根があり、特に黒坂付近の居根は険しい。

ある程度くだった所で足尾谷の河原へ下りた。ここで身支度、つまり地下足袋にワラジを着けるのであるが、私の場合、地下足袋の代わりにスパイク付きの岩足袋（磯釣り等で使用する磯足袋）を使っている。地下足袋にワラジは、水苔の上では滑りにくいが、歩いているうちにある程度日が詰まってくると、岩に乗るのが怖いぐらい滑るし、高巻き道等のゆるんだ土の上では、のめり込んで滑り止めがきかない。

確かにワラジのフリクションは素晴らしいが、安全性を考えるとスパイク付きの岩足袋を薦めたい。金額になるが少し寒い季節には、立ち込みの釣りに使うレイテックス製（クロロプレーン製）のウエイダーが体を冷やさないために好ましい。

山を歩く道具は登山用品店売りではなく、釣り具屋等も覗いてみるのもおもしろいと思う。

さて、本題に戻ることにしよう。足尾谷は、よく遡行するので次にどんな地形が現れるのか、どの滝壺に取り付けば安全かなど、ある程度は知っているつもりだが、台風や大雨の後は水量も増えているので、いつものように遡行するのは容易でない。

黒坂付近の難所をやり過ごして、いよいよ終盤に入ろうとした時、緩やかな流れの左岸に、黄色いジャケットを着た釣り人が七人ぐらいの細い竿から釣糸を垂らしてアマゴを釣っていた。私は邪魔をしないようにと、そっと左岸の草むらへ身を潜め、釣り人の姿を眺めようと顔を上げた瞬間、目の前の釣り人の姿が消えていた。おやっと思って辺りを見回したが、人の気配は感じなかった。

私は最初に釣り人を見た位置へ戻り、釣り人の立っていたと思われる場所まで近づいてみたが、その付近の石は濡れておらず、人の歩いた形跡もなかった。

ほんの一瞬の出来事に、どうしたものかと戸惑ったが、ここで考えていても仕方がないので、車をとめて置いた場所まで登山道を歩い

足尾谷を溯行する

て、その日の溯行を終えた。

帰路、大見の集落を抜けようとした時、車の中から、偶然にも釣り人の着ていたものと同じような黄色いジャケットが、杉林の中に吊り下げられ、大見川原を吹き抜ける涼風にふわふわと揺れているのが見えた。

その夜はむし暑く、眠れぬまま、脳裏には杉林の黄色いジャケットが、浮かんでは消え、浮かんでは消え、いつまでも、ゆっくり揺れ続けていた。

第23話

長治谷（ちょうじだに）作業所の扉

今から10年以上も前の話になるが、昭和53年6月29日、梅雨の真っ只中の出来事である。私は、友人と三人で木曽の御嶽山への山行を計画し、準備万端整えて、京都駅に近い友人の家に集まっていた。しかし、外は生憎トシャ降りの雨で、現地の小屋へ電話を入れるが、ここ当分晴れ間は望めないとのこと。

私達は思案したあげく、三人共同じ会社なので、同時に有給休暇がとれるのは、これが最初で最後かもしれないからと、山行場所を変更することにした。1時間近く話し合い、北山の由良川源流を歩くことになった。翌朝7時の出発と決め、荷物はそのままにして帰宅した。

次の日の朝、私の4WDは小雨の中を走る。もやのかかった北山の風景は、日本の美の真髄といえよう。雨も小止みになったところで、軽く朝食をとった。ちょうどそこは久多川合町の河原だった。

その後も私が運転し、途中酷道に着いたのは、10時30分頃だった。その当時、舗装されておらず、荒れた林道が峠まで続いていた。普通乗用車では、ちょっと走行が無理な状態ではなかっただろうか？

テント持参で、今日は長治谷作業所の横でキャンプをする予定だった。ひとまず荷物を小屋の前へ置いて、夕方までその近辺を歩くことにした。友人の一人は昆虫が好きで、話によると、何やらここの原生林にしか棲息しないカミキリ虫がいるらしい。霧雨の中を流れるもやは、ある一定の速さで深い緑間をすり抜けてゆく。立ち止まって凝視すると、あたかも私が雲の上に乗り、森の中をゆっくりと流れていくような錯覚にさえ陥る。

名も知らぬ昆虫やキノコ、草花をじっくりと眺めながら、まるで自然の博物館を観賞するように、ゆっくりと杉尾峠に着いた。今では、新井温泉は伐採され展望もよくなったが、その当時は深い緑の檜に囲まれた、由良川の水源をなす地点だった。

昼食は簡単にカップラーメンで済ませ、尾根伝いにある静かな踏み跡（けもの道）を辿ることにした。友人は何匹かの小さなカミキリ虫を採集し、満足気な様子だった。2～3時間探索し、再び上谷沿いの道を長治谷作業所まで戻る。降り続いていた雨は、いつの間にか止んでいた。私達のいる上だけに青空が広がり始めていた。友人の一人が「長治谷作業所の中って、どんなんやろなあ」と言いながら正面入り口から向かって右側の扉を開けようとした。鍵は掛っていなく、棒が差し込んであるだけで、それを抜けば簡単に扉は開いた。

中へ入ってみると、あまり使用されていないのか、机やシュラフが部屋の片隅に積み上げられていた。カビ臭い湿気が辺り一面にたち込めて、「ちょっと気味悪いなあ」と私達は外へ出た。

テントを張り終えると夕食の準備にとりかかった。あれこれと話が弾んで、時のたつのも忘れ、食事を終える頃には、辺りは薄暗くなりかけてきた。そうなると30分もたたぬ間に気速に暗くなってしまう。これといった話題もないのに話は弾み、暗闇の中に小さなランタンの燈だけが煌々と燃えていた。

夜も8時をすぎ、ふと瞬間に目をやると無数の蛍が闇の中に光の軌跡を描いている。今までに何度も蛍を見たが、これほど美しいと思える光景に出くわしたのは初めてだった。

「よし、今夜は小屋の前でザコ寝や！」と一人が言って、新聞紙を敷いてシュラフに入る。

長治谷作業所

私が「さっき、小屋の扉閉めたか？」と聞くと「わすれた」と言う。

「まあいいか」とそのままシュラフに入った。しばらくして小屋の扉規定付近でなにやらガサガサと音がする。ムササビでもいるのか、ちょっと気になったが、いつしか眠ってしまった。この後、小屋の回りで何があったかは知らない。

翌朝、用を足しに小屋の横へ行こうと何気なく、きのう中へ入った小屋の扉を見ると、なんと抜きっぱなしの棒は元通りに差してあり、おまけに古い緑色の大きな鍵まで掛かっている。他の二人にこの事を話すと誰も知らないという。私は背筋に何かゾッとするものを覚えた。

朝食も済み、小屋を後にするとき、私達の足跡とは別に雨上がりのぬかるみに真新しいウェディングシューズ（釣り人の履くフェルト底の靴）の跡が、はっきりと残っていた。しかも、この足跡は中山神社の前でプッツリと途切れている。足跡と小屋の鍵は関係ないのかもしれないが、誰も気付かぬ夜中に鍵を掛ける必要があったのだろうか？

たったそれだけの出来事なのに、私は今だに不思議に思えてならない。あの時もう少し調べてみるべきだったのだろうか。

あの朝、小屋の前にいた一匹のカマドクマだけが真実を知っているのだろうか。もしそうだとしたら、その一匹の虫に前夜の事を尋ねるより他に知るすべはない。

第24話

土中から聞こえる話し声

近くに人もいないのに土の中や水辺から話し声が聞こえてきたら、あなたはどうしますか……。

山の中など自然界には、科学では証明できない出来事も沢山あるが、この項でお話しする事は原因がある程度わかっているため、怪奇現象という分野には属さないかもしれない。

昭和62年頃、私は頭を求めて家内と二人で機敷ヶ岳へ登った。涼どころかカンカン照りで、夏の尾根道は体力は勿論に及ばず気分までいってしまう。休憩、休憩の連続で、二人共ぶつぶつ言いながら、何んとか山頂に辿り着いた。

汗の臭いを嗅ぎつけてか、いろんな虫が顔の回りや頭の上を飛びかう。最後にはダニにチクリのおまけまでついたので、山頂をそそくさと退散する。

帰路に選んだ下山路は、鉄塔下からの急下降道（巡視路）でいち早く祖父谷林道へ下りてしまおうというのである。

その途中、谷の細い流れに出合って、幾分

谷の傾斜が緩やかになっている地点だったと記憶するが、私が足を止めて「あれ、誰かの話し声がする」と言うと、案内も急に止まって、耳を澄ませた。それは女性の声で、時々男性の低い声も混じっている。

それがどこからなのか声のする場所がわからない。何やら足の下から聞こえてくるようにも思えるし、尾根の方から風に乗って聞こえてくるようにも思える。案内は水の中から聞こえるという。その方向へゆっくりと近づいてゆくと、はっきりと話の内容までが聞きとれる。それは水の湧き出る谷の落ち込みから聞こえてきていた。

「土の中に誰かいるのかなあ！」「まさか？」と言ったものの、この不思議な出来事の説明がつかない。

「おーい」と声をかけるが何の返事もない。しばらくその場に立ちすくしていたが、いつの間にか話し声は聞こえなくなっていた。

「けったいな事もあるもんやなあ」とお互いに顔を見合わせ、そのまま沼又谷の林道へ下り、マイカーを止めて置いた岩屋橋に向かった。

車の中で1時間程おやつを食べながら話していると、後ろから男性3名、女性1名の中年のハイカーが歩いてきた。

私は、「あの人達の声やったんと違うか」と言いながら、先程の出来事を振り返ってみた。そこで、ふと以前に見たテレビ番組を思い出した。それは怪奇現象の特集で、心霊だのUFOだのといった内容のものであった。

その番組で、アパートの一室での出来事が報じられていた。ある時刻になると水道の蛇口から話し声が聞こえてくるというものであった。それをある科学者は、水道の水が音を伝える媒体となって近くの部屋で話している声が同じ水道管を使用している別の部屋へ伝わり、その声が蛇口から聞こえてくるという説明をしていた。

私の体験した事もこれと同じ理由によるものではないだろうか。山の上から流れてきている地下水脈を媒体として、上で話している声が下山途中の谷間のそばから聞こえてきたと説明すれば、わかってもらえるだろう。

同じ年の冬にも家内と二人で同じ場所へ行き、今度は土中から鳥の鳴き声と羽音を聞いている。

こんな場所は他にも存在するだろうが、おもしろいと言えばおもしろい。しかし、もし私があのテレビ番組を見ていなければ、これもまた怪奇現象として受けとめていたに違いない。地下水脈が尾根付近のどの辺りへ通じているのか、確かめてみるのもおもしろいかもしれない。

第25話　野田畑峠の怪音

由良川源流の上谷を少し溯ると野田畑とよばれる湿原地帯が広がる。

ここは明治時代の末期まで木地屋の集落があったところで、今でも集落跡には小石を積み上げた墓地や切り株の残片が土中で朽ちている。湿原中央の流れの側にあるクロマツが屋敷跡の目印となっている。

この屋敷跡を調査しようと湿原へ踏み込んだが、ネマガリダケや密生する雑草に行く手を阻まれ、湿原中央で行きも戻りもできなくなった。悪戦苦闘の末、ズクズクになって湿原を突破したが、後からよく考えると登山道に沿って行けば何の苦労もいらないことがわかった。

屋敷跡に辿り着いた時、クロマツの大きさに感動した。周囲に大木がなかったせいもあるが、この木が木地屋の歴史を知っているのかと思うと、私も当時の様子を私なりに想像してみた。少し高くなった所が屋敷跡、水辺の広く開けた所が、木を切ったりする作業場だったのだろうか。

墓地は少し離れた場所にあるに違いないと山歩いを続けながら探したがわからない。

私は、墓地には墓石の彫り込まれた墓石があると思っていたが、それは大きな間違いだった。良材を求めて山から山へと移動する後ろは、死後はその土地に葬られ、自然の中へ還すのが習わしであったと聞く。おそらく成仏なら無く、墓石も建てられず、山中に穴を掘って埋め、墓石がわりに小石を積んで供養したにちがいない。

現在、小石が積まれたようなられる墓跡らしきものは、屋敷跡の裏山に何ヶ所か存在する。そこにはあきらかに人間の手によって石が集められたと思われる跡が残っていた。

そう後、私は第二の木地屋跡が近辺に存在すると聞き、野田畑谷をつめた。この谷の地形は少し変わっていて、峠の横を水が流れている。野田畑谷が大きく開け、流れも大きく左へカーブする地点の、前方の開けた鞍部が野田畑峠だが、クマザサに覆われ、峠道は廃道となっていた。峠の北側に桐木で囲まれた小さな墓地がある。

ここが木地屋の屋敷跡である。風も防げるし、水場も近く水量も豊富だ。屋敷を建てるには絶好の場所だったのだろう。今では、杉、檜の植林地となって当時の様子を偲ぶよすがもないが、恐らく大木の茂るこのあたりで、三軒ほどの木地屋がろくろを挽いて生計を立てていたことだろう。私は、峠を野田畑谷側へ少し戻り、開けた水辺で昼食にした。

盛夏の暑さから一時でも逃げられた私は、この幽閉に暮らした人達の苦労があろうと思いながら、深い深い緑の中でじっと耳を澄ませた。するとその時小鳥の囀りに混じって、ギーコ、ギーコと木を切るような音が谷の奥から聞こえてくる。確かに木を切る音だが、どの辺りからなのか全く見当がつかない。

こんな山奥で木を切っているなんて不思議なことだ。その上近頃では、チェーンソー等の機械を使うのに、ギーコ、ギーコとはどういう人達だろう。やがてその音は、次第に大きくなって、バシバシバシと小枝の落ちる音まで聞こえてきた。

私は好奇心にかられて谷の奥へと歩いた。この奥の源頭には、シンコボと呼ばれるピークがある。そこを目標にルートを変えた。いつの間にか怪音は消えてしまっていた。

ブナやトチの老木が空を蔽い隠すように茂る中、シンコボの山頂に辿り着いた。すると

新刊
霧の森〔ふくいの山・四季〕
増永　迪男　著
四六判・二〇〇〇円
野伏ケ岳のブナ、荒島岳のヒノキ、徳平山のミズナラ、足乃三のトチ、東線、紅葉、霧氷と四季折々の表情で「あの木」が待っている。

新刊
琵琶湖周辺の山
長宗　清司　著
四六判・二二〇〇円
―うり坊の足跡―比叡や比良、伊吹や鈴鹿など、近江の山々を、日帰り山行中心に気の合う仲間たち10年で100山歩いた足跡の記録。

ナカニシヤ出版
京都市左京区吉田二本松町2
☎京都 075-751-1211 〒606

木地屋の屋敷があった野田畑湿原

どうだろう、又、先程のギーコ、ギーコ、バシバシバシが聞こえてくる。今度は、今渡ってきた道の中腹の辺りらしい。作業をしている姿は見なかったし木も倒れていなかった。見渡した限り小枝等を切り落した形跡もなかった。

不思議な音は、しばらく続いていた。もう一度、今度は尾根伝いに音のする方向へ歩いてみた。音のする場所へ近づいているはずなのに、歩いても歩いても同じ間隔を保っているようで全く音源がつかめない。だんだん気味悪くなり、私は一目散に谷へ駆け下りた。

野田畑湿原の踏道を戻りかけた時、三人のパーティーに出会った。「こんにちは」と挨拶をしたが、私の言葉は、ぎこちなく、おそらく悲壮な顔つきだったに違いない。

地蔵峠へ戻るまでの数十分間、木立ちを見上げると、あの怪音がどこからともなく聞こえてくるような気がして、何度背筋に寒いものが走ったことだろう。

この芦生原生林を紹介した種々の本の中にも、谷の奥で木が倒れる音がしたとか、小屋の屋根裏で怪音がした等と、いろいろ不可解な出来事が記されている。ある生物学者によると、樹木も何百年か経つと自然の霊を宿すといい、木が、何らかの形でしゃべり、私達人間に向かを訴えようとしているという。

それら樹木の訴えを私は聞いたのだろうか？　この他にも私は、モンドリ谷の奥や、中ノツボ谷の源頭付近で木を削るような音を聞いたことがある。この山域には、樹齢何百年という老木が無数にある。こここそ自然界の霊場なのかもしれない。この夏、霊場の入り口をもう一度探してみようと思う。

最後に、余談とは思うが、深い深い山中を彷徨する山の民の生活を描いた映画に、『縄師』『物語』『秘宝』『建一』等がある。山の民の厳しい掟と人間くさい生活が描き出された、実際らしい作品である。興味のある方は、ビデオで鑑賞して頂きたい。

特長
① パラレル、インナーフレーム付
② スーパーウエストベルト付

GAIA

キャンプ・ハイキング　ザック

テトラ　48ℓ　　赤札￥9,000

アリゾナ35ℓ　　〃　￥6,800

GAIA-JAPAN
ヨシミスポーツ
〒543 大阪市天王寺区岡町通4-70
TEL06(772)7231
FAX.06(779)2191

京都北山　やぶ漕ぎ痛快山行記 (10)

皆子・峰床山系の峻峰 伊賀谷山を歩く

京都北山グループ

皆子山・峰床山は京都、滋賀の府県境に座すが、伊賀谷山は純然と滋賀県内に座して、滋賀県立朽木烏川自然公園の圏内にあり京都北山ではない。しかし広義に解釈され、京都北山のガイド誌にも記されている。

別名は西山。別称に八一平山、大倉山、兄谷山、伊賀谷山ともいわれる。頂上に3等三角点標石が立つ。ハイカーもめったに訪れない静かな山である。

昭和55年11月16日晩秋の木の葉も大部分落ちた時期に訪れて以来、無沙汰の山である。グループの1君がリーダーするから例会に組んでくれとのことでサブとして同行を引き受ける。季節を変え緑の裏山もまた趣が違い楽しいことと思う。

この日、新ハイキング関西の村田さんら一行が皆子山の例会で京都バスをチャーターとのこと、出町柳バス停で一緒になり、このバスに便乗させていただく。

若狭街道（別名鯖街道）と呼ばれる国道367号線を皆子山登山口、平集落へと走る。大原の戸寺集落を通り過ぎるあたりから物凄い雨が落ちてきて、新ハイキング組も我々も一時は山登りを見合わせるか、行き先を変更するかと車内は喧々囂々。天候回復を祈るのみ。

途中集落を過ぎ化粧峠にかかる頃から雲も切れ、雨も上がり車内は嬉しさに喝采の声が上がる。トンネルを抜け平バス停で新ハイキング組と別れ我々は芦火谷バス停まで。車窓から見る安曇川沿いの新緑の中に、合歓の花の色の調和がなんとも言えない。山ザクラ、シャクナゲの花も散ったこの季節、夏の花は合歓にかぎる。

芦火谷バス停で下車。帰路もこのチャーターバスに乗せてもらうので我々の下山口、葛川中村の学校前までの迎えを車掌に確認をと

八丁平中村乗越より伊賀谷山を望む

り、芦火谷林道へと出発する。

俄か雨で芦火谷の水量も増えている。新ハイのぼうの苦子谷も増水で大変なことだろうと察する。林道をしゃ程谷沿いに行くと右手に兄谷の入り口。小谷の左側、杉林の斜面に踏み跡仕事杣道あり、ここが取り付きで、リーダー1名とE君に踏ん張りとして登ってもらう。足もとはアザミ、ヨモギ、ススキなどの野草で踏み跡も判然としないが14名も歩くとすぐに登山道になる。墨西電力の本戸発電所への水路の橋を渡り、右山側の造林公社の仕事杣道を利用する。前に来た時は仕事杣道が無く、兄谷本流を四苦八苦してヨジ登り稜線にでた。鉄橋を渡り右の植林直後の山腹を兄谷沿いに判然とした道を登っていく。支尾根の稜線に右上、南に芦火谷へと延びて見え、その稜線への杣道もあるが、左の杣道をとる。ガレの小さな谷（兄谷の支流）を横切り、前の支尾根の右端に踏み跡を見つけこれを登る。この付近で標高700㍍。支尾根の右側を登っているので伊賀谷山側の稜線は見えないが安曇川側の367号を走る車も時々垣間見える。道の左は雑木林、右下は植生5年ぐらいの杉紅葉。一汗かく頃吊り尾根のピークに着く。ここで高度800㍍ぐらいか。北側に伊賀谷山から899㍍のピークに延びる主尾根が広がる。稜線の雑木の中に自生実然杉の頭が黒々と点在する兄谷の源頭の山肌を見る。右方は安曇川谷風しに比良山系白髭山、遠く武奈ヶ岳の御殿山吊根の後ろ姿の展望に見惚れ、小休止する。

目の前の吊り尾根、主尾根まで直線降下して790㍍鞍。最低鞍部まで70㍍の下り、左右の斜面は檜の幼木の植生直後、イバラが邪魔するが踏み跡はハッキリと付いている。対面の主尾根側の山肌は馬酔木、リョウブ、雑木林で、取り付き口に赤テープがあり突っ込み口が分かる。しばらく雑木のヤブ漕ぎだが左曲い方へと登ると、伐採で視界が広がり主尾根に登り着く。

伊賀谷右側をへだてて八丁平への中村乗越尾根から鎌倉山に延びる峰々が広がる。左にとると899㍍ピークを経てフジ谷峠へのヤブ漕ぎ尾根道、伊賀谷山へは右の雑木尾根のヤブ漕ぎ。この付近は平坦尾根でクモノ道と山やの踏み跡道が交差してややこしい所。水戸側は檜杉の二次林。伊賀谷側はナラやリョウブと天然杉の混成雑木林。北東に踏み跡を行くこと30分程で伊賀谷山三角点標石（900・7㍍）の立つ頂上に着く。ナラ、クヌギ類の広葉樹林の中に二坪程切り開かれて真ん中に赤白のポールが立つ。樹林のために展望がきかないが、木陰で谷風が通り抜ける涼しい場所だ。リーダーよりここでお昼弁当の指示あり14人が円座を開く。いつも我々グループはお昼時間は許されるだけの最長時間をとる。今日は葛川中村から新ハイキングチャーターの京都バス、時間が十二分にあり午睡までとれる贅沢？山行だ。前にきた晩秋の季節には樹間から琵琶湖の山肌が全望できたが、7月下旬の山は葉ッパの一番成長期、目に入るのは緑、緑、緑の濃淡のみ。

16時の迎えのバス時間をみて13時30分、伊賀谷山頂上を出発し下山にかかる。640㍍ピークへと延びる緩い雑木と雑木の尾根上の踏み跡道も山慣れしている者には難しくない。慌て急いでケモノ道に踏み込むといらんアルバイトのオマケが付く。筆頭にリーダーをサポートして高度を下げる。下り道の右下側前方は視界がきくが、左は雑木林で方向が分からない。現在地の確認もできない尾根筋である。640㍍ピーク付近は杉大樹の植林の中に踏み跡があり、道を捜すのにややこしい斜面尾根だ。方向を決め下降する。やっぱり右につられ下り、木戸の関電発電所の流水管の上部の建物に出てしまった。眼下には安曇川と国道367号線を見、発電所の建物も見える高所。前の時もここへダダ下りで着いた要注意個所。私の右利きクセが治らないと前回同行されたMさんと苦笑。前回は流水管横のコンクリートの急階段を下り木戸口バス停に出たが、今日は学校前にバスが来てくれるのでここで北へと修正して元の杉林の中へ。リーダーが杉林内に踏み跡道を見つけたとのコールで、左へトラバースして下降道に乗る。次酒れのガレ沢を横切り山ブヤメ（シャガ）群生の杉林下の道を降りる。

街道の車の音も喧しく聞こえる頃、二宮神社の梅の畑に下り着く。ここで高度350㍍。宮度坂にして550㍍の下降は楽しい山行であった。葛川中村小学校グラウンドの南側まで民家の裏の畑道を歩く。逆コースの場合は二宮神社の左（南側）杉植林の中に640㍍ピークへの仕事杣道がある。逆コースで芦火谷への山歩きも面白いと思う。静かで迷う心配もない。

時間通り迎えのバスが来てくれたが、バスの転回場所が葛川郵便局前しかないので、新ハイの皆さんが待つ平バス停には予定より大いに遅れて着いた。北山名物の俄か雨が新ハイ皆さんら34人の乗車を妨げるひと苦労の始末があり。車中酒パーティとも事故なく下山を語り合い出町柳終点まで楽しく交流できました。新ハイさんバス解散ありがとうさんでした。

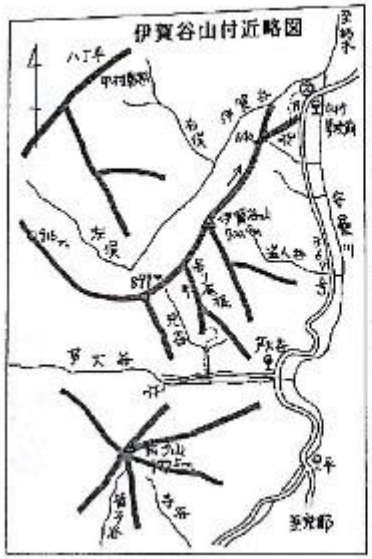
（平成4年7月12日歩く）

〈参考タイム〉▽芦町柳駅8・00▶芦火谷バス停8・50▶伊賀谷山12・00～13・30▶中村学校前15・30～16・20▶出町柳駅17・40

（地形図）2万5千▶花脊

昭文社▶「48京都北山2」

（記録　出口　東次）



訂正とお詫び

10号（初夏）5・6月号の紀行「遠北の峰峰・白倉岳」（13ページ）は私の登山地図の見間違いで己高山を白倉岳と思い込んでいました。本文の鬼山は五万分の地図の近江長岡（676・9㍍）でした。西股谷川を東股谷川の深谷だと勘違いして登ったのが原因で、我ながら全く恥しいミスです。識者の皆さまに御迷惑をおかけしたことを、誌上を借りて深くお詫び申し上げます。

小田九三郎氏の御指摘で、昨日の京都府広域自然保護委員会の自然観察例会の折に御教示頂き始めて気付いた次第で全く恐縮でした。（平成5年5月17日　坂井久光）

（左図参照）

白倉岳へは深谷をつめ、稜線をやや潜ぎで西へ行くのが正しいルート（雑誌）

文学歴史探訪ハイク ⑪

女人禁制・山上ヶ岳

松永恵一

山上詣り

大峰修験の炎が燃えさかり、うめつくした白装束の修行者の群が、叫ぶように経や心経を唱える。炎はいよいよ赤く地面を焦がす。

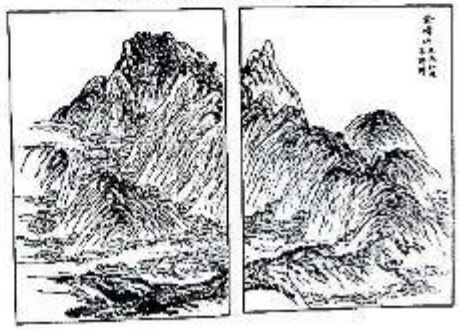
憔悴の炎が衰える頃、空は白みはじめ、蓮海のかなたより、ゆらゆらと揺らぎながら大きな真っ赤な太陽が姿を現す。

「山上詣りしてこんと一人前の男やない」大和や河内の村々には、山上講や行者講があり、男子が15歳になると山上詣りをする習慣があった。それは「大人」になるための成人儀礼であった。夜中に出発し、真夏の朝の涼しいうちに『聖なるお山』の山頂にたどりつく。

この、いのちあふれてうねりやまぬものを見よ。山全体に湧きおこる壮大な音楽を聞け。

『万葉集』巻十三に、「み吉野の　御金の嶽に……」という歌が載っていて注釈をひく。上代人にとっては吉野山中の高峰は霊峰であり、黄金浄土の理想郷であった。式内金峰神社の祭神は、金山比古、金山比売命である。永観二年（984）成立の『三宝絵詞』は、東大寺造立の時、大仏を塗り飾る金がないので、金の御嶽の蔵王に祈ったところ、「この山の金は、弥勒の世に用いるべし。我はただ守るなり。分けがたし」と言って、近江石山に観音を造って祈ることを教え、その結果陸奥から金が産出したという説話を伝える。

『宇治拾遺物語』巻二の「金峰山薄打の事」は、当時の人々が待っていた金峰山のイメージをよく伝えている。黄金を埋蔵する山、そして、おそるべき霊験あらたかな聖地。



金峰山（日本名山図会　谷　文晁著）

金剛蔵王出現

白鳳の昔、多くの鬼神を駆使して葛城山から金峰山へ橋をかけようとした修行者（役小角）は、修行最後の場を金峰山山上ヶ岳に見いだし、一千日の精進と苦行をしたと伝える。

『峯中秘伝』によると、行者の激しい行にこたえて、まず弁財天があらわれた。天河弁財天である。さらに苦行を重ねると地蔵菩薩が示現された。なおも祈りつづけると、岩山が揺れ動き、雷鳴と稲光とともに岩の間から顕現したのが、怒髪の形相に躍り上がる降魔の身を現した金剛蔵王権現であった。三眼をかっとみひらき、右手に三鈷杵を握ってふりかざし、左手は刀印を結ぶ。左足は岩石を踏まえ、右足を大きく上げる、怒髪を逆立てた形相だ。

悪魔は人間の心の中に棲んでいる。それを調伏しようとする修行が、修験道だ。

御岳精進

平安時代には宇多天皇の行幸をかわきりに極楽往生を願う貴族たちの参詣があいつぎ、金峰山の名声は隣国の宋にまで聞こえていた。『義堂六帖』第二十一日本国の条にくわしい記述が残る。金の御岳に寄せる王朝人の熱き思いは、『源氏物語』や『栄花物語』などからも偲ばれる。清少納言は『枕草子』「あはれなるもの」で「よき男の若きが御岳精進したる」と述べた。酒色を断って斎戒沐浴する御岳精進は、三か月に及んだ。

御堂関白道長が金峰山に詣でたことは、あまりにも有名な話である。『御堂関白日記』によると、寛弘四年（1007）閏5月17日に御岳精進を始め、8月2日に京都を出立、大安寺・壺坂寺・吉野寺を経て、9日吉野に着き、10日山上にのぼり、11日法要・埋経供養、午後下山、14日発京まで13日間を要した。このとき、道長は『法華経』『般若心経』などを金銅経筒に入れて蔵王権現の御在所の宝前に埋め、その上に金銅の灯籠をたてた。それには「望月の欠けたるところなし」と詠歌した当代随一の権力者の「臨終のとき身心散乱せず、弥陀尊を念じ、極楽世界に往生せん」との願望が託されていた。

その後、藤原頼通、師通、白河上皇などがつぎつぎに御岳詣でをし、経巻、銅鏡、懸仏などを埋納した。これらは元禄四年に行われた大峰山寺本堂再修の際に発見された、我国最大の金峰山経塚である。

昭和五十九年に大峰山寺の解体修理にともなって発掘調査が行われたところ、平安時代の護摩壇、その他の遺構があらわれた。護摩壇は平安時代の初期から中葉にかけて使用されたものと考えられている。この調査で人々の注目を集めたのは二体の黄金仏をはじめ、ガラス製小建築部材、経巻断片、仏具、銅鏡など、大量の華麗な遺品であった。二体の仏は阿弥陀如来坐像と菩薩坐像で、いずれも純金のかわいらしい仏像。現在までのところ宇多天皇が寄進されたという説が有力視されている。

大峰山の説話

京都の七条辻りに、金銀を薄くのばして、箔に打つ職人が住んでいた。その職人が御岳詣でをした時に、山崩れした所で金属の塊を見つけた。金のようであったので、拾って持って帰った。粉にすりおろして調べてみると、本物の金であった。「この金で暮しをたてよう」と思って、秤にかけて見ると十八両（約675g）であった。薄く箔に打つと七、八千枚に打てた。

「ひとまとめにして、みな買ってくれる人がいればいいな」と思って、しばらく持っていると、「検非違使が、東寺の仏像を作るための金箔を探している」と教えてくれる者がいた。早速買い上げて貰うことを申し出た。検非違使は、破れず、広く、色もすぐれていたので、広げて数えようとして見ると、その箔のことごとくに、小さな文字で、「金の御嶽金の御嶽」と書かれていた。

あわれな箔打ちの職人は、貧苦の河原に引き出され、七十度の拷問を加えられ、背中は、紅の単衣を水で濡らして着せたように、血でびしょびしょになった。重ねて獄に入れられ、10日ほどして死んだ。その金箔はもとの金峰山に戻されたという。

（『宇治拾遺物語』「金峰山薄打の事」）

コース概観

今回のコースは、洞川から山上ケ岳へ登り、裏・表の行場で修行をし、大峰山寺に泊まってでレンゲ辻谷を下りる。修験道の道場・山上ケ岳は現在も女性の登山を禁じているただひとつの山である。女性への煩悩を断った修行者たちが、苦行に励んでいる。女人禁制、それは長く信仰によって守られた掟なのだ。

近鉄下市口駅で下車。洞川温泉行きのバスに乗る。S字カーブ、ヘアピンカーブの連続を登る。左窓に金剛・葛城の展望が開け、広橋の梅林が斜面一帯に広がる。丹生川上神社下社を左窓に見、笠木を経て天川川合の信号を左にとると紅葉。道は洞川へと下る。

洞川は標高820mの谷間にある集落。修験道の開祖、役行者が約千三百年余り昔、開山したと伝えられる霊峰大峰山（山上ケ岳1719・2m）の登山口に位置している。大峰山寺修験寺院のひとつの宿坊として発展してきた。集落の人達は役行者に使役された後鬼の子孫という伝承を持つ。龍泉寺は役行者が八大龍王尊を祀って修行した地。水行場として知られる。

龍泉寺の前の橋を渡り、林間学校、クラブ合宿で賑わう旅館街から登山口に向かう。途中、五代松鍾乳洞の上り口横に、洞川源水群のひとつ「つるごろ水」がある。付近の洞窟に反響するのか、豊富な湧水が大岩の間から流出し、ゴロゴロと音をたてて流れていたのでゴロゴロ岩と呼ばれてきたという。古くから大峰山の修験者の喉を潤し、今も多くの登山者に至福の名水を提供している。

杉木の中を百度すると役行者が山上から下りて母と会ったと伝える母公堂。「従是女人結界」の石碑。現在は大峰大橋（浄土大橋）が女人結界。大橋前に駐車場がある。

門をくぐる。信者たちの酔み固めた道はよく整備されていて歩きやすい。杉の木立ちが見事だ。山の木の間ばうっそうとしてほの暗い。木の間を通す光が、山道を時々明るくする。

一ノ世茶屋は中を通り抜けていく。山腹の巻き道を展望を楽しみながら登って行く。一本松茶屋で一息いれよう。窓から洞川がよく見える。同じような登りを繰り返し行くと「役ノ行者慈悲之乃助水」の石柱の立つ御助水。岩の間からしみ出るミネラルウォーターに喉をうるおす。「洞川まで6300m」山上ケ岳頂上まで2710m」の標柱が立っている。二少年の遺難碑に黙祷すると、まもなく洞辻茶屋。吉野道と出合う。「洞川へ八十丁　吉野へ百八十丁」と古い石標が残る。出迎え不動尊に合掌し、陀羅尼助茶屋を通り抜ける。

苦い陀羅尼助は洞川特産の胃腸の薬。役行者が創案したという。主成分は黄柏などのベルベリン。洞川のそこかしこで売っている。

急な木の階段が続く。右が巻き道。直進すると「泣こぼし」の難所。表行場の始まりだ。鎖のついた一枚岩を登る。足場はしっかりしている。続いて理源大師像の前から20m余の垂立した岩場を鎖を頼りに登るのが「鎖掛」の修行。右に巻き道がある。

鎖掛けと　とうて尋ねて　来ず見れば
九穴の義士　ここにこそあり

鎖掛岩の上に出る。すばらしい眺望である。正面に金剛・葛城の同理山が山頂をつくる。奈良盆地が眼下に広がり、今登ってきた登山道が樹間に走る。さわやかな風が頬をなでた。胸いっぱいに緑の空気を吸う。

道の真ん中に「お亀石」がある。役行者の母が亀の姿に身をかえて行者に会いにきた霊跡と伝える。

お亀石　よるなさわるな　寸つくな
よけて通れよ　笠の新客

岩肌の出た道を右にそれると「四の覗」。断崖絶壁の上から谷底に向かって四周にロープをかけて逆さづりにされるおそろしい修行。先達が「覗茶を行するか」「覗行を言わぬか」「嫁さんを大事にするか」。返事が遅かったり声が

小さいと、身を支えているロープを少しゆるめる。身体が少しずり落ちる。怖さにふるえながら必死に「はい」と声をあげる。

有難や　西の覗で　さんげして
弥陀の浄土に　入るぞうれしき

浄心門をくぐると左右に「大峰登山五十度」「三十六度」等、修入り供養塔が林立する。右手に龍泉寺の宿坊、左へ道をとると四つ

の寺院宿坊へ到る。宿坊でしばらく休憩。ビブラム底の山靴をスニーカーに履きかえ、裏行場の案内を依頼する。本堂の北西側にひっそりと静まりかえる裏行場は、一巡約1時間。十八カ所の行場があり、いずれも険しい難所が続く。「胎内潜り」「平等岩」を経た新客は母の胎内に入って生まれ変わる。「蟻の戸渡り」

笹深み　霧越すくきを　朝立ちて
なびきわずらふ　蟻の戸渡り　西行法師

「平等岩」裏行場最後の難所である。岩の鼻を巡る修行をする。

平等岩　廻りて見れば　河古岳の
拝つる命は　不動くりから

大峰山寺の屋根は堂々として男っぽい。どっしりとおごそかであった。こんな山上に、よくもこのような大建築が建てられたものだ。

本堂前の台地には湧出岩があり、ここで役行者が蔵王権現を感得したと伝える。

今夜は山頂の宿坊に泊まって、耳あかりに冴えわたる山の精霊の声に耳を澄ませよう。

すがすがしさに満ちた朝。まだ暗いうちに宿坊を出て霧海のさ霧に消れたお花畑に行く。初夏だというのに、吐く息が白い。空はまだダーク・ブルー。やがて山の稜がきっと明るくなったかと思うと、はるか下の木々の間に垂れこめた霧を引き裂くように朝日が射し込む。目の前は弥山。すぐ右に見えるのが稲村ケ岳。まいったと爽快な感覚に白旗を振る。

お花畑からレンゲ辻への下りはすさまじい急坂。ハシゴの連続。岩肌を削ったすべりやすい道を足元に注意して慎重に下りる。女人結界の門をくぐるとレンゲ辻。和文・英文の女人禁制の注意書きがある。直進すると稲村ケ岳。右の谷を下りて大峰大橋へと出る。

＜コースタイム＞

近鉄阿倍野橋駅（特急1時間）近鉄下市口駅（奈良交通バス一時間30分）洞川温泉（5分）龍泉寺（1時間）大峰大橋（50分）一本松茶屋（40分）御助水（35分）洞辻茶屋（10分）陀羅尼助茶屋（50分）西の覗（10分）宿坊（泊）宿坊（10分）大峰山寺本堂（35分）レンゲ辻（2時間）大峰大橋（1時間）洞川バス停（徒歩）近鉄阿倍野橋駅～下市口駅　790円
下市口駅～洞川温泉　1210円
（地形図）　2万5千1　洞川・弥山
（問い合わせ先）
奈良交通営業所　07475（2）4101
天川村企画観光課07476（3）0321
洞川温泉観光協会07476（4）0917
宿坊案内・龍泉寺07476（4）0001

たのしい山歩き

尾瀬雑考⑪

「地名と言葉」

松下　満

世の中には難読・難解な地名や言葉が多くある。私もここ関西に住むようになって大変困ったことがある。私市・枚方・放出・立売堀と枚挙にいとまがない。

尾瀬にもやはりそんなところがある。また誤った語釈で伝えられている言葉もあるのでいくつか列記してみよう。

燧ケ岳（ヒウチガダケ）＝東北地方最高峰の山でよく見ると大小五つのピークがあり、柴安嵓・俎嵓が有名である。また山頂付近では数万年前の噴火口が見られる。平成三年に国土地理院より従来の標高より10㍍高い2356㍍と訂正発表されている。

三仏山（シブツサン）＝高山植物の豊庫でシブツ・オゼを冠した植物もある。乾燥石で形成された山で、濡れているときは滑りやすいので要注意。

景鶴山（ケイヅルヤマ）＝尾瀬ケ原竜宮付近より北に見える頂上に二つコブのある山で現在入山はできない。

平滑の滝（ヒラナメノタキ）＝燧ケ岳の噴火で流出した溶岩が川床を形成し、約500㍍の一枚岩の上を水が滑るように流れている。

沼尻（ヌシリ）＝ヌジリ・ヌマジリと言う人もいるが正しくはヌシリで沼尻川・沼尻平である。

高層湿原（コウソウシッゲン）＝高層湿原に咲く水芭蕉。こんなコピーをみたことはありませんか？標高の高いところにある湿原を高層湿原だと思いこんでいる人が多いようですがこれは誤りです。湿原に生育する植物、その他の条件により低層湿原・中層湿原・高層湿原に分類され、低層湿原ではミツガシワ・水芭蕉が多く見られ、中層湿原の代表的な花はニッコウキスゲです。高層湿原のよく群落しているところは尾瀬ケ原竜宮付近・大江湿原の小淵沢田代分岐を入ったところで、湿原が凸レンズ状に盛りあがって見えます。よく見るとミズゴケがびっしりと生え、トキソウの花が楽しめます。

池塘（チトウ）＝堤を築きめぐらして水を湛えた池のこと。尾瀬の湿原の植物は秋に枯れても腐ることなく堆積され、一年に1㍍くらい湿原を高くしています。池の辺りの植物も同じで、あたかも堤防を毎年1㍍ずつ築あげしているようなものです。この現象は鳩待峠・竜宮林道に点在する湿原ではっきりと見られます。傾斜地の湿原に立派な堤防ッを持った池、自然現象とはいえ不思議な感があります。

桧の突出し（ヒノキノツキダシ）＝尾瀬沼東岸から西へ向かって半島のように突き出している。尾瀬沼東に聳える桧、高山の麓野かも。

田代（タシロ）＝田圃のようなとの意らしい。尾瀬には何々田代と称するところが多い。上田代・中田代・下田代・赤田代・兎田代・横田代・上田代（竜宮林道）・御池田代・小淵沢田代等いずれも湿原である。また平を付けた湿原にアヤメ平・柳平・大清水平がある。

他によく間違えられる地名・名称を挙げてみよう。御池・燧ケ岳・七入・雪割橋・押出沢・牛首・渋沢・長蔵小屋（ナガクラゴヤと言う人が多い）また尾瀬は片品・檜枝岐・湯檜曽の三ケ村に跨がっている。

関西周辺

盛夏の山

特選　コースガイド

1 飯盛塚山　　3 御神山
2 伊吹山北尾根　　4 烏帽子山

遊歩の道（大峰）

暑苦しい都会を抜け出して、涼風の山を歩くとなると、関西の山で適当なところはどこだろう。比良や鈴鹿もよいが、やはり大峰山系の涼しさが一番だろう。

山麓も高尾にあって、滑在型の避暑を兼ねる山行にはうってつけのエリアといえる。

交通の便がよくて、登山道がはっきりしていて、しかも下山後は温泉でさっぱりできるという贅沢な山行、それには洞川や坪内を拠点としたコースがよいだろう。

近鉄下市口駅からバスで約1時間30分。山間にあるこれら大峰の登山口に着く。

一日目は、「ミクライ渓谷」に遊ぶ。近くには温泉旅館や民宿も多いし、整備されたキャンプ場もあるので好みに応じて宿泊し、明日の山行に備えよう。

洞川温泉からは「山上ケ岳」（女人禁制）や「稲村ケ岳」が往復できる。

「弥山」へは天川谷から梨子汁経由で登る。弥山小屋で泊まり、翌朝「八経ケ岳」で御来光を拝む。下山は栃尾江から栃尾山経由で坪内へ。天ノ川温泉（公衆浴場）が待っている。弥山への日帰りはタクシーで行き過トンネル西口まで入れば可能だ。

日数に余裕があれば、好みに合わせ奥駆道を縦走してみよう。針葉樹林帯や岩場など、関西の山のイメージとはちょっと違う雰囲気があるだろう。もちろん素晴らしい展望も待っている。

今月号は大峰の紀行文がいくつかあるので参考にして夏の予定を組んでみてはいかがでしょうか。涼しさを満喫できる渓谷や稜線をめざして……。

特選コースガイド 11

室生

三鈷ヶ岳から 飯盛塚山

中級コース（★★）

高嶋礼詩

このコースは、三鈷ヶ岳と飯盛塚山の間以外は道といえるようなものははとんどない。私達が歩いたのは8月下旬で、かなり激しいやぶに覆われていた。展望よりもやぶ漕ぎが好き。というすばらしい根性を持っておられる方にはおすすめのコースだろう。

近鉄田原本駅8時42分発の電車に乗る。この車内で、今回一緒に行くUさんと落ち合う。大和八木駅で乗り換えて、室生口大野駅で下車。ここから奈良交通血原橋行きのバスに乗った。

本来ならば宮橋で下車するのだが、間違えて一つ手前の太古良橋という停留所でバスを降りてしまった。太古良橋から宮橋までは歩いて6分ぐらい。宮橋は渡らず、橋の手前で右折。西へ延びる林道ハイタケ線に入る。水分神社の前を通り、やがて原山への道を左に見送った直後、北側の斜面でガサガサッという音がした。振り向くと、やぶに覆われ、胴体の一部しか見えなかったので、何か分からなかったが、大きな動物が走り去っていった。こんな野生動物が見られるのも、マイナーな山の魅力の一つだろう。

標高460㍍付近の緩い曲り角で林道を離れ、三鈷ヶ岳の東面から南へ延びている尾根にとりつく。最初の4～5分は植林の中の登りで楽だが、すぐに雑木の密生するやぶと化す。夏のためか猛烈なブッシュで、ナタで切り開かないと前進不能といった所が何ヶ所かある。おまけに二度ぐらい、高さ2～3㍍程の岩壁におち当たったので、それを巻いて通らなければならなかった。

540㍍のピーク（地図では分からないが、実際はピークになっている）に着くと、始めて南側に展望が開けたので一服する。林道からここまではたった80㍍の標高差だが、かなり体力を消耗してしまった。

このピークから、やぶがようやくうすくなり、道らしき踏み跡が出てくる。しかしこの踏み跡もやがて消えるが、もうやぶはそれほどひどくはない。尾根上を忠実に辿ると、難無く、土山と三鈷ヶ岳とを結ぶ稜線に出る。

船中より飯盛塚山（左の山）

この稜線上にはまともな道があり、西へ5分足らずで三鈷ヶ岳頂上に着いた。頂上には3等三角点があり、雑木の間から高見山、住塚山、沼山、笠置山等を望むことができる。ここで昼食。「大和の三角点を尋ねて」を奈良新聞に連載しているUさんは、三角点標の撮影とその周辺の清掃に余念がない。

食後、すぐ出発。飯盛塚山に向けて稜線上を南西へ進んだ。三鈷ヶ岳の西隣の730㍍ピークには、NHKのアンテナがあり、そこを過ぎると急なくだりとなる。この稜線上には所々倒木等があるが、道はしっかりとついている。しかしほとんどが植林の中なので、変化に乏しい。住塚山方面の展望が東に開ける720㍍ピークを過ぎ、急な登りにさしかかると、飯盛塚山の頂上まではあと一息。この急坂を登り終えた所が飯盛塚山頂上である。

下田口峠という集落からこの飯盛塚山を見ると、槍のように尖っていて、なかなかかっこうがよいが、実際、頂上に立ってみると、南側の展望がやや開けているだけで、植林に囲まれた平凡な山頂だった。

ここから南へくだって、迷い峰を経由して三郎ヶ岳へと縦走するのも面白そうだが、今回は西へ延びる尾根を伝ってカトラ池へ下山することにした。

飯盛塚山からカトラ池へは、尾根を外さないようにくだるだけなので迷う心配はないが、かなり激しいブッシュである。道はもちろんなく、私はこのくだりで顔面と両腕にたくさんのひっかき傷を作ってしまった。

カトラ池の堤防を渡ると、仏隆寺と室生寺を結ぶ林道に出て、この林道をくだって室生寺前バス停に着いた。カトラ池からは、室生寺と逆方向に林道を辿って、仏隆寺を経て高井へ出ても行程的にそれほど差はないだろう。

（平成4年8月28日歩く）

〈コースタイム〉

太古良橋バス停（20分）林道から尾根への取り付き点（1時間5分）三鈷ヶ岳と土山稜線（5分）三鈷ヶ岳（60分）飯盛塚山（30分）カトラ池（50分）室生寺前バス停

〈地形図〉 2万5千―大和大野 昭文社―「58宇陀・倶留尊高原」

〈交通〉 近鉄室生口大野駅から奈良交通バス血原橋行きに乗り「宮橋」下車

〈この花・この草〉

アサガオ（Pharbitis nil CHOISY）

ヒルガオ科（Convolvulaceae）

小学一年生の夏休みの自由研究の一番人気は朝顔の観察日記ではないでしょうか。学校から持ち帰った鉢に、支柱を立てたり水をやったり、一喜一憂して世話した思い出が私にもあります。

万葉の昔、アサガオというよりキキョウやムクゲを指し、今日我々が目にする朝顔は平安遷都の頃、若狭使が薬用として種子を持ち帰ったものです。これが江戸時代に観賞用として珍重されるようになり、品種改良がなされた結果、大輪咲きや変種の色彩やかなお花を持つ園芸品種が作られました。

九月一日にこの朝顔の種子を採取し、天日で乾燥させたものをケンゴシといいます。有効成分は、極性配糖体のファルビチンで、腸粘膜をはじめ下腹部に充血をきたし、強制運動を亢進して強力な瀉下作用を示します。薬用としては、利尿・殺虫を兼ねた瀉下剤として下半身の水腫や尿閉症に用いますが、作用が強烈で用量が微妙なため、家庭で試してみようとは思わないで下さいネ！

特選コースガイド図

湖北

日帰りで 伊吹山北尾根へ

中級コース（★★）

濱田啓司

伊吹山（1377・1㍍）は滋賀と岐阜の県境付近、JRや名神高速の北側に聳える山で、新幹線の車窓からも見え、人々に親しまれている。

伊吹山の登山は麓の上野から約4時間、道はきわめて明瞭で、夏は夜間登山をする人も多い。登りは少しきついが山小屋も多く、頂上付近のお花畑も素晴らしい。

バスが使えるので、夏は誰でも手軽に楽しめる山だ。しかし孤立峰で、天候は変わり易く霧もまくので注意が必要だ。

頂上には薬師堂もあり日本武尊の銅像が立っている。展望は素晴らしく、よく晴れた日には琵琶湖や鈴鹿山脈・奥美濃の山々・遠く北アルプスや御嶽なども見える。冬はスキーのメッカだ。

この伊吹山から北へ、滋賀と岐阜の県境をなす尾根が伊吹山北尾根である。眺望が素晴らしいので山好きの人には人気のあるコースだが、時間的にも、地理的にも行きにくいのでどうしても敬遠されがちであった。

しかしバスがJRの大垣または関が原から伊吹山頂上直下まで、7月21日から8月末までは毎日午前中に何本も出る。

大阪を早朝に出発すれば昼前には頂上に到着出来る。時間の関係上バスの中でも昼食をとって、着いたらすぐ行動できるようにしておこう。

7月半ばの日曜、伊吹山北尾根のハイキングに出かけた。関が原からバスで頂上に向かう。頂上駐車場に着いたら、歩いてお花畑を通って頂上の360度の展望を楽しんでこよう。約1時間で往復出来る。北尾根の縦走は、頂上駐車場から寺本まで4時間以上かかるから、18時25分頃寺本を通る最終バスに乗るとしても、逆算して13時頃には駐車場を出発したい。またこの尾根には水場がないので水筒を用意したほうが良い。

頂上駐車場からバス道を1㌔ほど引き返すと、直線のバス道は急に東に曲がってヘアピンカーブとなる。この曲がり角が伊吹北尾根の入り口だ。登りのバスで見ておくとよい。

伊吹山北尾根を行く

ガードレールの外れから左へ急な山肌を少し下ると、北尾根藤部の静馬が原である。ここに小さな標識がある。イブキトラノオやピンクのシモツケソウが咲いていた。

静馬が原から1132㍍のピークを越える。この辺りは、粘土と石灰岩の岩の道で、雨が降れば滑り易い道だ。緑濃い山道にリンドウの白や紫の花が咲いている。

小さなコブを何度か越えて尾根筋の上り下りが続く。途中休憩をとりながら、静馬が原から1時間15分で1070㍍の御座峰に着いた。御座峰は伊吹北尾根の中心部に当たる。

ここからの尾根も上り下りで大発山へと続く。湿度が高く汗が滴り落ちる。大発山から国見岳への縦走路は、石灰岩のため岩が尖り非常に歩きづらい。足を傷めないように気をつける事が必要だ。

カエデの樹木が山道に沿ってずっと続いている国見岳の頂上に近くなって、シロバナホタルブクロが沢山咲いていた。トラノオやシシウドなども咲いている。

国見岳の標高1122㍍。頂上で休憩した。せまいところだが雑木の間から展望が開け、どっしりとした伊吹の頂上が見えている。交代しあって伊吹山の頂上をバックに写真を撮った。国見岳頂上から林間の尾根筋を行くと足元にはオオバコがぎっしり生えていた。すぐ大きなパラボラアンテナのある雑木林に着いた。北側に展望が開け、美しい絵のような景色が広がる。スキー場も足下に見えている。北尾根のルートは西に折れて国見峠に下る。パラボラアンテナに続く鉄の階段に出て涼しい風に吹かれながら、ひとときの展望を楽しんだ。階段を通ってどんどん下ると、灌木にハナミズキに似た花が咲いていた。

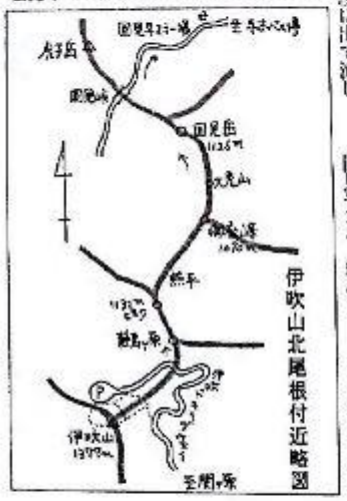
途中から山道に移り、あとは林の中に付けられた急傾斜の木の階段や山道を下る。膝や足が痛くなってきたころ、国見峠に出てやっと下の林道に着いた。暑さで息が切れ、拭いても拭いても汗が滴り落ちる。

スキー場の木立ちのない林道を下るので太陽がギラギラ照りつける。スキー場の下に出て水場に着いた。この山は石灰岩で上部は伏流だが、麓には綺麗な水が出ている。休憩して冷たい水で思い切り喉を潤した。

国見峠スキー場のヒュッテに着いた。緑の木立ちにわずかに風が吹いていた。ここから寺本までは下り徒歩50分〜1時間ぐらいだ。

寺本から名阪近鉄直通バスで近鉄揖斐駅へ。夕方は16時39分頃と18時26分頃の2本しかないので乗り遅れないようにしよう。揖斐駅からJR大垣駅へは近鉄電車で約25分だ。

国見峠への下り（鉄の階段から北の山をみる）



ハコースタイム〈伊吹山頂上往復（1時間）

頂上駐車場（20分）静馬が原（1時間15分）御座峰（25分）大発山（30分）国見岳（5分）アンテナ（25分）国見峠（15分）スキー場ヒュッテ（1時間）寺本バス停

〈地形図〉2万5千―奥東・関が原

沼文社―「44霊仙・伊吹・藤原」

「彩画山彩」

松田敏男 山の絵画・版画展

7月5日(月)〜7月17日(土)

（日曜日休廊）

午前11時〜午後7時

（最終日は午後5時まで）

ギャラリーふぉれすと

大阪市北区梅田1丁目1の3

大阪駅前第3ビル地下2F

TEL 06-348-0503

特選コースガイド図

御神山（みかみやま）

中級コース（★★）

慶佐次 盛一

備後

ここに紹介する備後の御神山は、JRなど公共交通機関を使ってのアプローチでは大阪からの日帰りは難しいが、大阪と三次間の中国自動車道定期バスを利用すれば、日帰りを可能にしてくれる。最寄りのバス停は帝釈で、帝釈峡を過ぎた中国山地の丘陵上にある。まるで御神山登山のために設置してくれたような有難いバス停である。

御神山は「日本山岳志」に「御神山（別称三上山）備後国比婆、甲奴、神石ノ三郡に跨ル、比婆郡帝釈村大字末渡ヨリ一里十四町、甲奴郡五箇村ヨリ二十五町ニシテ其山頂ニ達ス、標高二千九百九十尺」と紹介されている由緒ある山である。

夏の低山徘徊は暑くて苦しいが、帝釈バス停は標高500㍍を越えた尾根上にあり、緑したたる山々からそよぐる涼風は、しばし都会の暑さを忘れさせてくれるであろう。

梅田の三蓋低層型バスターミナルから三次行きの一番バス（7時30分発）に乗る。バスは全席予約制で、帰りの便も予約できる。帰りの便は個人の御方にもよるが、私は帝釈発最終便の17時15分のバスを予約して余裕をもたせた。帝釈のバス停で下車すると、南方にとがった姿を見せているのが御神山で、昔は雨乞いの山でもあった。帝釈到着はちょうど昼頃になるだろうが、昼食をするのにふさわしい場所はこの先いくらでもあるから、まずは御神山に向かおう。

バス停の陸橋を下りると、ムラサキツメクサや月見草、野アザミなどが道端に咲く静かな農道となる。小さな谷間の両側に田んぼが拓かれ、青々と育った稲の中で働く農家の人達のムギワラ帽子がのどかだ。

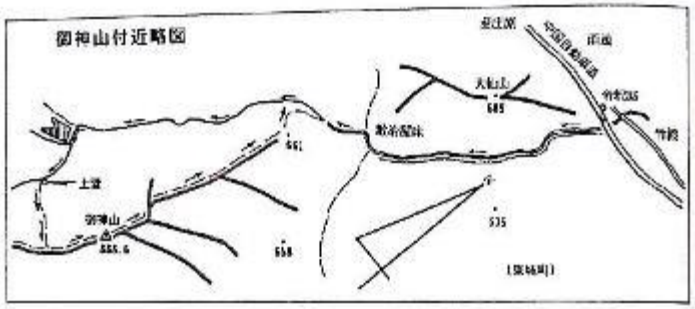
田んぼはすぐに終わり、両側から山が迫る。農道を渡う樹林に暑い日ざしは遮られて意外と涼しい。アスファルトの農道は通る事もほとんどなく、鶯を流れる谷川のせせらぎやセミの鳴き声が一層涼感を盛り上げてくれる。

農道を渡っていた樹木もやや開けて明るくなり、前方に御神山の一角が見えてくる。バス停から見た姿よりは緩やかである。農道が右へ曲がると鍛冶屋床の村に入る。わずか数戸の農家が集居する集村だが、鍛冶屋という村名は昔のタタラ製鉄を連想させる。見知らぬ間入者に犬達の大合唱が始まるだろう。きれいな水を利用して鯉の養殖もしているのか、丸々と肥えた鯉が水槽に飼われている。この村に来るまでに、「入山禁止」の札が所ところにかかっていたので気になったが、村人に聞いてみると今日の登山には関係なかった。恐らく秋の昔の紅葉の繁忙だろう。

鍛冶屋床の村を過ぎて、御神山西麓の溜池へのびている林道に入る。空き地に放置されている廃車が少々目障りだが、すぐに静かな地蔵の林道になる。地形図では破線で示されているが、実際には車も通れる立派な道だ。途中で左に道を分けるが、緩い登りの本線を歩いて溜池（林道からは見えない）に突き当たる。

ここで林道は左折してすぐに二分する。右

御神山頂の2等三角点



は溜池の右岸沿いの林道で、登山道は左のテープが残されている道に入る。最初は少々藪っぽいが、次第によく踏まれた山道になり、御神山の西麓の植林帯を巻きながら続いている。しばらく歩いていると、道端の左にセメントと思の大きな土管が放置されている。ここが御神山南の廃鉱に登って行く破線の道の入り口だからよい目標になるし、赤いテープも残されている。

左折して植林の中に入る。はっきりした山道が現れ、しばらく山道をたどってゆくと、沢状の地形に下り山道は消える。辺りは檜の幼木帯で、木の下は硬までの笹が覆っている。正面に御神山の稜線が見え、それを目がけてひたすら笹をこぐ。ここは日ざしを遮げるものもなく、一汗も二汗もかくがしばらくの平坦。稜線に登り北上するとT字三角点の御神山頂上である。

山頂は西が少し開け、眼下に溜池が見え、日本ピラミッドとも呼ばれる帝釈山の山並みが望める。もう赤トンボが飛び交い、休憩していると嘘のように汗がひく。

帰路は頂上から北へ下ろう。地形図の破線の道は、稜線の左を巻きぎみにほぼ残っており、藪に返っているのは一か所だけで、それもわずかの間である。植林、雑木の間を縫いながら徐々に高度を落とし、最後は急巻して植林帯の平坦地に下り、小川を渡渉して元の林道にでる。ここから鍛冶屋床はすぐで、帝釈に戻かれながら帝釈のバス停へ戻る。

〈コースタイム〉

帝釈（25分）鍛冶屋床（30分）溜池（40分）御神山（1時間）鍛冶屋床（25分）帝釈

〈費用〉

大阪～帝釈往復＝7552円

〈地形図〉2万5千＝帝釈峡

〈問い合わせ先〉

阪急バス　0826（86）3147

茶　通信販売

くつろぎとやすらぎのティタイムには
やっぱりお茶!! ティパックが便利です。
山へお持ちください。ご家庭でもどうぞ。

1、玉露	3g	全品1袋毎に農薬検査
2、ほうじ茶	3g	どれでも1袋入
3、玄米茶	4g	300円 2500円を2000円 送料450円
4、ウーロン茶	4g	200円 5000円を4000円 〃 350円
		300円 7500円を6000円 〃 無料

■商品は1袋毎にお届けします。
■代金は郵便振替（茶屋）でお送ください。
◎サービスステーションの方に…
業務用茶葉ティパックがございますので、ご一報ください。

茶専門店 じゃっぽえん
お茶の中村園
代表者 中村長明（茶屋36年、山歴30年）
〒559 大阪市浪速区塩草1-2-22
TEL 06(656)0110
FAX 06(656)0415

特選コースガイド④

南紀

陰陽の滝から烏帽子山（えぼしやま）

中級コース（★★）

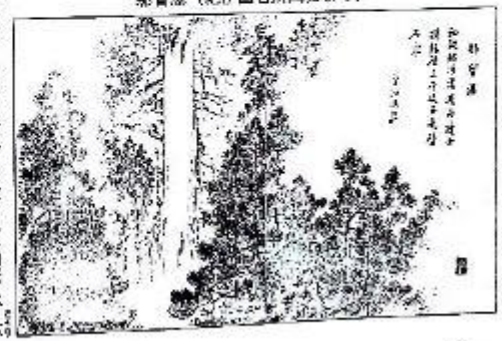
児嶋弘幸

那智四十八滝は熊野参詣道と結びついた行場として、壮麗な修験道の様儀とともに、星宿とも結びついて体系化されていたらしい。那智大滝の一の滝をはじめ、四十八滝すべてを信仰の対象として滝巡行が行われてきた。

平安の頃始まった全国の他に類を見ない滝巡行は、江戸時代には最盛期を迎えることになるが、明治五年の廃仏毀釈運動によって、その営わしは途絶え、口伝であった那智四十八滝の所在もベールに包まれることになる。それから一世紀余り、平成3年7月、那智四十八滝調査のプロジェクトチームが結成された。画家・稲田光花が描いた那智四十八滝の絵図と古文書を手がかりに、熊野古道の調査活動が展開された。3ケ月間の山行き・調査を経て、ついにその全貌を捉えることに成功した。

ここでは、東の谷を起点に烏帽子山に登り、那智四十八滝のメインコースを歩き、その醍醐味を味わおう。

JR天王寺駅からきのくに線に乗り一JR那智勝浦駅下車。熊野交通バスに乗り熊野大門坂バス停で下車する。かつて熊野詣での道として賑わった大門坂の入り口を示す標識が左手にある。ここではバス停を過ぎて右へ下って那智川を渡り、東の谷右岸の道をたどる。しばらく行くと石段があり、これを登ると東の谷を代表する陰陽の滝前に出る。二条に落ち水を作るところから夫婦滝、また古くは奈可悟（なかご）の滝とも呼ばれる。なかごは星の運行を人の運命と結びつけて占う宿曜道、二十八宿の星名、なかご星に由来し、縁起にある。



那智瀧（紀伊国名所図会より）

陰陽の滝の手前で、左手からクラガリ谷が流入し、夜見の滝をかけている。クラガリ谷は博物学者の南方熊楠が植物や粘菌の採取に好んで入った谷と言われている。夜見の滝落ち口付近で、クラガリ谷を対岸に渡り、左に布利智里、珠保志の滝への小道を見送る。陰

陽の滝右岸上部の道となり、右前方遥元におしたれの滝が望見できる。

渓流に沿って進み、左岸に道を転じる。支流を渡り、右手に烏帽子山尾根コースを見送り、なお東谷に沿う道を歩く。再び右岸に転じ、左に岩小屋を見送る。左岸に渡り返し、低木帯の急斜面の登りとなる。やがて巨大な一枚岩に突き当たる。この岩に40mの高さから末広がりに水を落としているのが惣尾の滝である。

滝の右手の小支流に沿う道を進み、舟見峠付近からの林道に飛び出る。右手尾根に取り付き、雑木林を急登する。山腹をトラバースへ、大宝山から西に続く稜線に出て、右にクマザサを分け入ると頂上直下の骨りとなる。木の根にすがり、岩角をつかんで登ると、左に山岳修験行の祖、役小角（えんのおづぬ）行者の残していった帽子岩がある。そのまま岩となったと伝えられる帽子岩は山の由来となったという烏帽子に似た岩がぽつんと立っている。ここは大雲取山方面から奥熊野の山々、那智高原、妙法山の景観が眼下に広がる好展望台である。

もとの道に戻って再び雑木林の道を急登。標高909・2m一等三角点の烏帽子山頂上に飛び出る。東から南、西にかけての展望が開け、熊野川河口から勝浦、さらに西方眼下には熊野灘を遠景に大島方面の眺望が開けている。

下山路は先ほどの道を林道まで引き返し、東へ10分ほどで指導標があり、登山道を左に泉彩谷へ下る。右岸沿いの道で、途中、3m足らずの大日霊女の滝。別名、太陽の滝がある。おおひるめは天照大神の別称で日神、いわゆる太陽神を指す。昼な

陰陽の滝から烏帽子山

地域に合った品揃えを目指しています。
三重県唯一のプロショップ
登山・スキー・アウトドアのことならおまかせ下さい。
登山・スキー・アウトドア
GRINDELWALD グリンデルワルト
営業時間　AM10:30～PM 8:00　毎週月曜日定休
三重県四日市市諏訪町13-3　TEL 0593-54-0627

陰陽の滝

お暗い杉林の中を抜けた林道の右手傍らに山の神を祀る祠がある。すぐ先を左手、那智川本谷と鬼杉谷との間に道を選ぶ。鬼杉谷を横切ると谷の音がひときわ高く響いて来る。

本谷を右手足元に眺めながら、那智原生林の中の苔むした道となる。やがて本谷にかかる教智橋の滝が眺められる。おだやかで優広いが落差はない。明るい渓谷美を楽しめるところだ。二十八滝の一つで、双子峰に在る。ガ星がちらり星である。しばらくして三の滝落ち口の左岸上部に達し、滝を大きく絡む。下りきると、右下左岸沿いに三の滝への道が分岐している。水面ぎりぎりの岩壁をへつると、深く広がった淵を配して荘厳観賞滝とも呼ばれる三の滝と対面する。

先ほどの分岐点まで戻り、転石を拾って本谷をなおも下る。ほどなく高さ約21m、幅7mの二の滝が目の前に現れる。二の滝に奇能した西行法師は、少し傾いた滝の形状を観音の像容に似せて「如意輪の滝となむ申す」と記している。変幻な滝で、滝壺は落下点を中心に扇状に広がり、霧多淵と呼ばれている。

これより転石を伝いながら右、左に歩行を繰り返し、ほどなく本谷と西の谷の出合で西の谷を右岸にとる。木の根を伝って鞍部に出ると、那智高原への道が石に分岐する。左へ山腹を伝って老杉の中を一気に下る。

三重の塔遥手に飛び出ると、熊野那智大社、青岸渡寺はすぐそこだ。那智山は明治期の神仏分離により、青岸渡寺と那智大社の二社寺となり、現在に至っている。

青岸渡寺からは、三重の塔を手前に配して那智一の滝の雄大な姿が望見できる。帰りを急ぐ場合は、那智山、または滝前バス停からバスに乗ってもよいが、時間があれば大門坂を下ってバス停に出るコースをお勧めする。

参道の石段を下り、天をおおう杉の下、熊野詣での道として賑わった旧参道の大門坂を下る。大門坂の杉並木は樹齢おこそ600年、県の天然記念物に指定されている。日本一の名瀑、那智の一の滝を背に、夫婦杉から民家の並ぶ道筋を抜けると、大門坂バス停に帰り着く。

〈コースタイム〉

JR大土寺駅（普通夜行列車5時間30分、特急3時間30分）JR那智勝浦駅（熊野交通バス20分）大門坂バス停（20分）陰陽の滝（1時間）双滝の滝（20分）秋滝（40分）烏帽子山（1時間10分）山の神（20分）二の滝（15分）三の滝（30分）那智山バス停（20分）大門坂バス停

〈地形図〉2万5千＝新宮・紀伊勝浦

〈問い合わせ先〉

熊野交通バス　0735（22）5101

那智勝浦観光協会0735（2）5311

青岸渡寺宿坊「尊勝院」0735（5）0401

東京本社

『新ハイキング』

（月刊）

昭和25年創刊で、以来40年余全国のハイキングファンに親しまれています。

入会金　500円
年会費　5400円

新ハイキング社

（振替口座　東京3-146915）

新ハイキング関西の山 1号～10号 総目次

随想（山のエッセイ）

数字の見かた　4 92初夏43 は 4号92年初夏号43ページ と読む

1 91晩秋5　金峰羊山の石柱　平野　耕也
1 91晩秋7　錦園と美しい　北林　治
2 92新春6　二冊の本　安田　憲弘
2 92新春7　モミの木　平野　耕也
3 92陽春6　ペン・ネイビス山のこと　渡邊　孝一
3 92陽春7　蓬蘆　稲垣いつを
4 92初夏6　オニヤブンテツ　屋垣いつを
4 92初夏7　自然破壊と山の回復　内田　嘉弘
4 92初夏8　ハイキングのきっかけ　上田　三男
5 92盛夏6　クマの話　平野　耕也
5 92盛夏7　新緑から見える山①　内田　嘉弘
5 92盛夏8　山歩き雑感　出口　憲次
6 92初秋6　アヅイク　稲垣いつを
6 92初秋7　新緑から見える山②　内田　嘉弘
6 92初秋8　大杉谷にて　吉田　信秀
7 92晩秋6　リングワンデリング　慶佐次盛一
7 92晩秋7　忘れた弁当　松坂　春男
8 93新春10　陸想（金峰羊山の石柱）を読んで　山岸　智子
7 92晩秋8　イタドリ　山岸　智子
8 93新春12　デ・レーケについて　内田　嘉弘
8 93新春12　吉山　吉田　信秀
9 93陽春10　リョウメンシダ　稲垣いつを
9 93陽春10　犬連れの単独行　内田　嘉弘
9 93陽春11　比良折立山の山来　柳本　逸雄
10 93初夏10　再び金峰羊山の石柱文字について　篠原　義雄
10 93初夏10　山岳俳句のきっかけ　吉田　信秀
10 93初夏12　シジョウ登山家　シジョウハイカー　山岸　智子

紀行・コースガイド

北アルプス

8 93新春23　立山三山縦走　岩田　勇次郎
10 93初夏24　霞沢岳　松田　敏男

南アルプス・木曽

1 91晩秋15　恵那山から富士見台へ　由子
5 92盛夏9　光岳から聖岳へ　松田　敏男
6 92初秋52　二ツ森山と南木曽岳　内田　嘉弘
10 93初夏58　小秀山と御岳山　内田　嘉弘

三河・奥三河・南信

8 93新春31　知多・渥美半島の1等三角点　多摩　雪雄
10 93初夏32　馬伏山　山崎　修
4 92初夏9　北壁　内田　嘉弘
4 93初夏22　大日山　松田　敏男
4 92初夏50　取立山　濱田　啓司
6 92初秋9　荒倉岳　増水　勝男
6 92初秋12　大登山　松田　敏男
9 93陽春16　大長山　松田　敏男

美濃・奥美濃・湖北

1 91晩秋9　晩秋の横山岳　山本　一男
5 92盛夏50　南宮山　慶佐次盛一
5 92盛夏54　金糞岳　村田　智俊
6 92初秋20　鍋ケ岳と鼎枯ヶ森　多摩　雪雄
10 93初夏16　三方崩山　石塚　潔

鈴鹿・避東・湖南

1 91晩秋9　快晴の入道ヶ岳　稲垣いつを
2 92新春16　烏帽子岳　内田　嘉弘
2 92新春50　鎧ケ岳　小山ひろし
3 92陽春46　藤原岳　小山ひろし
3 92陽春52　鈴鹿山から竜ヶ岳　村田　智俊
4 92初夏12　船ケ谷から高ケ岳　福井　賢治
4 92初夏48　東中山　慶佐次盛一
4 92初夏52　貴船岳　小山ひろし
5 92盛夏19　岩間山から立木山　森山　啓三
7 92晩秋9　国見岳　稲垣いつを
7 92晩秋19　綾子ケ口　松田　敏男
7 92晩秋24　太郎坊山と雲野山　多摩　雪雄
7 92晩秋28　安土山（安土城跡）　蓬莱　米男
8 93新春13　二上山　蓬莱　米男
8 93新春52　雨乞岳　小山ひろし
9 93陽春30　御池岳・藤原岳　鶴井　賢治
9 93陽春54　大観峰　慶佐次盛一

伊勢・志摩

2 92新春 9 伊勢神宮と朝熊山 多摩 雪雄
6 92初秋 54 堀坂山 小山ひろし
8 93新春 56 金北屋山 福井 正身

比良・野坂・若狭

1 91晩秋 22 三国山から赤坂山 柴垣 貞夫
1 91晩秋 46 奥の深谷源流へ 秦 康夫
2 92新春 52 武奈ケ岳（比良） 濱田 啓司
3 92陽春 12 釈迦岳桟道縦走 柴垣 貞夫
4 92初夏 24 磯砂山 多摩 雪雄
5 92盛夏 22 駒ケ岳（寺山） 遊津 米男
5 92盛夏 52 八淵の滝から比良山頂 濱田 啓司
6 92初秋 48 百里ケ岳 出口 憲次
8 93新春 28 堂満岳中央ルンゼ 松田 敏男
9 93陽春 28 雲谷山 内田 嘉弘
9 93陽春 52 箱館山 濱田 啓司
9 93陽春 58 武奈ケ岳（比良） 秦 康夫

京都北山・丹波・東山

1 91晩秋 18 小野村剃岳 村田 智俊
2 92新春 20 千歳山から鎌ヶ岳 遊津 米男
2 92新春 48 天高山 坂井 久光
3 92陽春 46 国石山から槇ケ嶽 安田 憲弘

南山城・奈良

4 92初夏 54 神野山と鍋倉渓 村田 智俊
5 92盛夏 48 長山 内田 嘉弘
6 92初秋 50 矢田丘陵を歩く 濱田 啓司

雲生・台高

1 91晩秋 12 表情豊かな迷岳 松田 敏男
1 91晩秋 44 住塚山と国見山 濱田 啓司

2 92新春 26 岳の洞 稲垣いつを
2 92新春 9 馬ノ鞍峰 廣佐次盛一
3 92陽春 23 奥ノ逢峰（千石山） 松田 敏男
7 92晩秋 12 雲海の白髭岳 酒井 賢治
8 93新春 16 三郎が岳・高城山 阪本 健治
9 93陽春 13 古光山から亀山峠 柴垣 貞夫

吉野・大峰

2 92新春 12 ドウドク山 廣佐次盛一
2 92新春 45 稲河ケ岳 松田 敏男
6 92初秋 27 大普賢岳 酒井 賢治
7 92晩秋 54 天和山と高城山 内田 嘉弘
8 93新春 54 槙ノ塔と渓谷 上田 俊弘

高野・熊野

7 92晩秋 48 慈尊院から丹生都比売神社 児嶋 弘幸
8 93新春 58 高野女人道を歩く 児嶋 弘幸
10 93初夏 32 果無山脈東部縦走 酒井 賢治
10 93初夏 54 伯母子岳 濱田 啓司

紀泉・紀北・南紀

1 91晩秋 48 天狗倉山 小山ひろし
3 92陽春 50 生石ケ峰 濱田 啓司
9 93陽春 24 井関峠から妙石山 多摩 雪雄
9 93陽春 56 三星山 児嶋 弘幸
10 93初夏 56 酬門山 児嶋 弘幸

六甲・北摂

2 92新春 23 天台山から妙見山 安田 憲弘
5 92盛夏 26 羽束山・布見ケ岳・大岩岳 安田 憲弘
7 92晩秋 50 西お多福山 安田 憲弘

播州・淡路

3 92陽春 15 金口山 多摩 雪雄
6 92初秋 23 笠石山 廣佐次盛一
10 93初夏 52 三草山 廣佐次盛一

その他（山陰・九州）

5 92盛夏 28 羽白山と鳥取山 多摩 雪雄
5 92盛夏 12 中岩岳 稲垣いつを

エリア別登山研究・京都北山 北川 裕久

1 91晩秋 26 落葉を踏んで紅葉の里山コース
①貴船ケ岳28 ②鞍馬山29
③瀬杉山・金毘羅山30
④天ケ岳とシャクナゲ尾根32
2 92新春 30 新雪を踏んで冬の日溜りコース
①善提ノ滝と沢ノ池32 ②地蔵山33 ③朝日ケ峰・峠山34
④三頭山36
3 92陽春 28 陽春の北山核心部を歩く
①半国山30 ②桟敷ケ岳31
③北山の峠めぐり32 ④二ノ瀬ユリ34 ⑤長坂越と十三石山35
⑥持越峠とダラノ坂36
4 92初夏 28 新緑から初夏へ、さわやかコース
①白波山30 ②桑谷山31 ③腕村八丁と衣懸坂32 ④只喫谷山34
⑤東梁山35 ⑥城谷国境尾根と竜ケ坂36
5 92盛夏 32 涼を求めて、北山の渓谷美を歩く

①皆子山34 ②足尾谷遡行35
③八丁平と峰床山36 ④三国岳38
6 92初秋 30 秋の気配を感じて、郷愁コース
①ホサビ山と平蒲岩士34 ②白尾山35 ③知井坂と八ケ峰36
④頭巾山38 ⑤三国峠40

京都北山やぶ漕ぎ痛快山行記 京都北山グループ

1 91晩秋 33 音無の滝から高雲山
2 92新春 37 愛宕山鋼索鉄道跡（旧ケーブル軌道）を探索レポ
3 92陽春 37 チセロ谷山からナメラ谷
4 92初夏 38 スモモ谷遡行とチセロ峠探索
5 92盛夏 39 足尾谷右俣遡行とチセロ峠探索
7 92晩秋 39 伊勢谷右俣から八丁平・峰床山
8 93新春 43 薬師峠から烏帽子ケ岳・祖父谷峠
9 93陽春 43 ツボクリ谷から岳子山
10 93初夏 43 シャクナゲ尾根から姥彩山

文学歴史探訪ハイク 松永 恵一

1 91晩秋 38 二上山に芭蕉の足跡を訪ねて
2 92新春 40 三輪山に神々を訪ねて
3 92陽春 40 東大寺二月堂に春を求めて
4 92初夏 42 天の香具山に夏来るらし
5 92盛夏 42 天川・弥山に滝を求めて
6 92初秋 42 暗峠に菊の香を偲んで
7 92晩秋 42 紅葉の多武峰・談山神社
8 93新春 46 高安城から信貴山
9 93陽春 46 北・山ノ辺の道
10 93初夏 46 大和・葛城山から竹内峠へ

連載 日本霊山紀行 浅野 孝一

3 92陽春 19 1 富士山
4 92初夏 17 2 御嶽山
5 92盛夏 15 3 槍ケ岳
6 92初秋 15 4 立山（大汝山）
7 92晩秋 16 5 金剛山
8 93新春 20 6 大雲駒ケ岳
9 93陽春 19 7 仙丈ケ岳
10 93初夏 19 8 鳳来寺山

アウトドア・ライフ入門 二名 晨日

1 91晩秋 20 ①ドライフラワーを楽しむ
2 92新春 18 ②アニマル・トラッキング
3 92陽春 26 ③フキノトウ研究
4 92初夏 20 ④草花遊び
5 92盛夏 24 ⑤山菜・野草食理
6 92初秋 18 ⑥薬草をさがそう
7 92晩秋 22 ⑦秋の木の実
8 93新春 26 ⑧室中ビバーク術
9 93陽春 22 ⑨木の芽ツッチング
10 93初夏 22 ⑩木の葉酒

たのしい山歩き・尾瀬散考 松下 満

1 91晩秋 37 ①「尾瀬は山である」
2 92新春 44 ②「ジャンケン大会」
3 92陽春 44 ③「春に咲く尾瀬の花」
4 92初夏 46 ④「初夏を彩る、尾瀬の花々」
5 92盛夏 46 ⑤「華やかな、夏の尾瀬」
6 92初秋 46 ⑥「尾瀬を彩る草もみじ」
7 92晩秋 46 ⑦「白い尾瀬」
8 93新春 50 ⑧「木道の今昔」
9 93陽春 50 ⑨「尾瀬に生きる人」
10 93初夏 50 ⑩「尾瀬ツアー今昔」

連載エッセイ

京都北山 ほんまのはなし 北川 裕久

7 92晩秋 33
1話 プロローグ33
2話 初めての単独行33
3話 道草登山のすすめ36
4話 思い出深い山行とは37
5話 北山の魅力は12月にある38
6話 淋しい節足の白い風景36
7話 正月の山38
8話 遅ればせのクリスマスツリー39
9話 ウサギの道案内40
10話 雪に歩行の新兵器41
11話 ヤブ山桟話35
12話 悲しき残雪の風景37
13話 ある女性との巡り逢い39
14話 私に北山以上の魅力を与えたもの40
15話 おばあちゃんの形見42
16話 花尾根の思い出36
17話 林道を辿って下るへんてこ野郎36
18話 古き時代へタイムスリップ38
19話 渓流魚とのふれあい39
20話 きらめく石仏の涙41

沿線ハイキングガイド

近鉄　京阪　阪急　南海　神鉄　山陽電鉄　叡電・京福
公開ハイク　歩け歩け大会　文学散歩　歴史散歩　その他

近鉄

▽夏山キャンペーン「大峰山山伏修行一日入門」　7月31日(日)～8日目個別集合吉野線下市口駅前14時40分〈コース〉1日目下市口駅―洞川温泉（泊）　2日目洞川温泉―大峰大橋―洞辻茶屋―山上ケ岳往復―洞川温泉―上市口駅（約20㌔）　会費9000円バス代2420円は別途、定員120名電話申し込み制、中学生以上の健康な男子、講師地元先達、天王寺事業06（624）0382

○同企画は8月28日(日)～29日(日)にも催されます。

▽文学散歩「聖徳太子物語キャンペーン　天翔る聖徳太子の道を行く」　7月4日(日)集合近鉄大阪線藤井寺駅前10時〈コース〉藤井寺駅―葛井寺―道明寺―野中寺―来目皇子墓―塩塚古墳―古市駅（約7㌔）　会費200円拝観料別途、参加自由、講師大阪教育大学短期大学教授岡田保造氏、天王寺事業06（624）0382

▽焼売ファミリーハイキング近鉄沿線やまとの水をたずねて「深谷童謡渓谷を歩く」　7月4日(日)集合大阪線室生口大野駅前10時20分〈コース〉室生口大野駅―大野寺―聖徳仏―室生ダム―童謡渓谷―殿辻地蔵―室生寺前―室生口大野駅（約9㌔）　会費無料バス代340円小人170円は別途、参加自由、天王寺事業06（775）3566

▽特別企画「夏の大台ケ原日帰りの旅」　7月4日(日)集合あべの橋駅東口テレメイトセンター7時30分〈コース〉あべの橋駅―大和上市駅―大台ケ原―日出ケ岳―正木ケ原―牛石ケ原―大蛇嵩―シオカラ谷―大台ケ原―大和上市駅―あべの橋駅（約9㌔）　会費5750円小人3100円定員150名電話申し込み制、あべの橋東口テレメイトセンター06（624）0026

○同企画は7月11日(日)、18日、25日(日)にも催されます。

▽夏山キャンペーン「大台ケ原土曜ハイキング」　7月10日(日)集合吉野線大和上市駅前9時30分〈コース〉大和上市駅―大台ケ原―日出ケ岳―正木ケ原―牛石ケ原―大蛇嵩―シオカラ谷―大台ケ原―大和上市駅（約9㌔）　会費2000円、定員40名電話申し込み制、中学生以上60才までの健康な方、講師奈良山岳会、天王寺事業06（624）0382

▽歴史散歩お伊勢さん125社めぐり「二見めぐり」　7月25日(日)小雨決行集合鳥羽線鵜方駅前バスのり込10時30分〈コース〉鳥羽駅―池の浦社前―棗島子神社―松下社―神島神社―二見興玉神社―御塩殿神社―神宮御園―汐合―宇治山田駅参詣7社（約13㌔）　会費2代3860円小人2060円は別途、定員200名電話申し込み制、講師大阪府立大東高等学校講師鶴田正人氏、天王寺事業06（624）0382

○同企画は7月31日(日)、8月14日(日)、講師大台教会田坦内達一氏で催されます。

▽近畿登山夏山キャンペーン「大杉谷探勝登山」　7月24日(日)～26日(日)集合吉野線大和上市駅前9時30分〈コース〉1日目大和上市駅―大台ケ原―（東コース）―大台山の家（泊）　2日目山の家―大杉谷渓谷―桃の木山の家（泊）　3日目山の家―大杉谷渓谷―大日―大杉―松阪駅（約28㌔健脚向き）　会費2000円、定員40名電話申し込み制、中学生以上60才までの健康な方、講師奈良山岳会、天王寺事業06（624）0382

▽歴史散歩お伊勢さん125社めぐり「二見興玉神社―御塩殿神社―神宮御園―汐合―宇治山田駅参詣7社（約13㌔）　会費2

090円バス代別途、参加自由、講師ザ・伊勢講受入協議会、名古屋事業059３（54）7007

▽特別企画「夏の大台ケ原一泊の旅」　8月7日(日)～8日(月)集合あべの橋駅東口テレメイトセンター06（624）0026

▽特別企画「大峰山と稲村ケ岳一泊の旅」　8月14日(日)～15日(月)集合あべの橋駅東口テレメイトセンター06（624）0026

▽歴史散歩お伊勢さん125社めぐり「外宮めぐり」　8月22日(日)小雨決行集合山田線宇治山田駅前10時10分〈コース〉宇治山田駅―饒古館―倭姫宮―世義寺―外宮―一日市―月夜見宮―伊勢市駅参拝12社（約10㌔）　会費200円、参加自由、講師ザ・伊勢講受入協議会、名古屋事業059３（54）7007

京阪

▽比良連峰アタック③「白滝谷・大滝谷コース」　8月29日(日)雨天中止集合JR堅田駅9時30分〈コース〉堅田駅―坊村―伊藤新道出合―牛コバースベり石―夫婦滝―江谷―木戸峠分岐―山口駅・打見山―山頂―志賀駅（約7㌔）

阪急

▽第33回健康とふれあいハイキング・ウォーキングトライ「六甲の散策道を歩く」　7月4日(日)雨天中止　集合中・上級コースは六甲ケーブル下駅9時～9時30分　初級コースは六甲ケーブル山上駅9時30分～10時〈コース〉〈初級〉六甲ケーブル山上駅―六甲山頂―山口駅・打見台―六甲ホテル前―十字ケ辻―三国池―市立自然の家―仏谷峠―アゴニー―坂―摩耶ロッジ前―摩耶山ケーブル山上駅（8㌔2時間55分）（中級）六甲ケーブル下駅―アイスロード（前ケ辻谷）―前ケ辻―十字ケ辻―三国池―市立自然の家―仏谷峠―アゴニー―坂―摩耶山―史跡公園―摩耶ケーブル山上駅（11㌔3時間55分）（上級）六甲ケーブル下駅―アイスロード（前ケ辻谷）―前ケ辻―シェラインロード分岐―ノースロード（ダイヤモンドポイント）―三国岩―六甲牧場―摩耶観音道―シェール道分岐―アゴニー坂―摩耶山―史跡公園―摩耶ケーブル山上駅（14㌔4時間50分）阪急山の家035（373）5326

▽愛宕山・千日詣りハイキング　7月31日(日)雨天中止　集合嵐山駅午後4時～山発午後4時30分〈コース〉嵐山駅―宝積寺―野々宮―二尊院―鳥居本―試峠―清滝―（表参道）―愛宕山神社―（裏参道）―清滝―京福嵐山駅―嵐山駅（15㌔中級向き）※7月31日～8月1日の夫明にかけて参詣すると、千日分の御利益が得られるといわれています。　懐中電灯持参阪急山の家035（373）5326

神戸電鉄

▽神鉄土曜ハイキング「丹生山系・竜釈山・鉱山跡コース」　7月3日(日)雨天中止集合神鉄都駅9時35分〈コース〉藍那駅―藍那古道―市営鉱山跡―竜釈山―丹生山参道―市バス丹生神社前―藍那駅（約15㌔上級向き）事業課078（521）0321

▽神鉄ハイキング「丹生山田文化にふれる・上谷上鵜村舞台と金剛寺コース」　7月11日(日)集合谷上駅10時5分〈コース〉谷上駅―上谷上農村舞台―金剛寺子山―鵜尾谷―宝谷駅―（約10㌔一般向き）事業課078（521）0321

▽神鉄ハイキング「初秋の味覚をさがしとり・金剛寺と三木平井山ぶどう狩り」　8月8日(日)集合大村駅10時10分〈コース〉大村駅―金剛寺―加佐印―妙部―三木平井山ぶどう園（割引入園）―恵比須駅（約10㌔一般向き）事業課078（521）0321

せせらぎ

たのしかった山行の思い出や記録。四季の自然情報など。常時投稿下さい。
1行15字詰20行以内に。

題字・小林玻璃三

多紀アルプス三稜・小金ヶ嶽の登山口である火打岩方面の年前中のバス便が便利になった。

今年の3月18日から、本篠山10時5分発の火打岩行きのバスが日曜日に限って運行している。篠山口9時46分発の本篠山行きのバスに乗れば本篠山で火打岩行きのバスに連絡しているが、本篠山まで行かずとも、二つ手前の城北口のバス停で下車して火打岩行きバスを待った方が料金的に得。

小金口バス停からの小金ヶ嶽正面コースも、新しい道標が立ち、部分的に階段も新設されている。

今まで、アプローチはタクシーを頼りにしていた地域だけに、JRバスのサービスに感謝する。便利になった多紀アルプスをお楽しみ下さい。（塵佐次 盛一）

3月26日に九州開聞岳に登って来ました。これで九州の山は久住山と合わせて二度目になります。

日本百名山の中に入っていなければ、関西からわざわざ登る山ではないのですが、ちょうど41山目になりました。九州で残している山は宮之浦岳と祖母山。反対に北海道では、利尻山と幌尻岳です。

今年は南アルプス塩見岳以南の縦走、中止になっている鹿島槍ヶ岳行なども実現したいと思います。

関西の山では、室生山系で残している後古光山と古光山への登頂。台高山脈の三峰山から高見山への縦走、朝神岳から池小屋山への縦走で、稜線を駆けることなどです。

すべて実現できるとは限りませんが、今年は区切りの年にしたいとも考えています。（三田 信秀）

本誌に山紀行を投稿しはじめて約一年になりますが、拙文にもかかわらず度々掲載され、喜びとともに責任をも感じています。

先日も家族から「お父さんの紀行文は山からの展望ニ辺倒やなあ…」などと言われました。

サービスチェーン 新ハイキング

どこへ行こうか
新ハイ関西サービスチェーンへ

名峰・二岐荘山 小白森・大白森・甲子・紅葉への展望美渓 1名でも歓迎 駅迄往復可・要予約 鷹天尾岳と内湯
福島・二岐温泉 日観連 大和館
〒962-06 福島県岩瀬郡天栄村二岐温泉
電 0248-88-2022 F 0248-88-2705

秩父鉄道 東武鉄道 クーポン券も利用できます
秩父 不動の湯
〒368 埼玉県秩父市山田243-2
電 0494-23-1126

富士巻山・富士五湖 東海自然歩道 (石割山・ハリモミ純林)
三国山の麓 ペンション コットンテール
〒401-05 山梨県南都留郡山中湖村平野
電 0555-65-8515

四季織りなす乗鞍高原のハイク 上高地・乗鞍岳へ 冬はスキー けやき造りと味の宿・日観連
温泉旅館 けやき山荘
〒390-15 長野県南安曇郡安曇村乗鞍高原
電 0263-93-2555

私が山へ登る最大の目的が、山頂からの大展望を楽しむ事にありますので、紀行の文章もどうしても展望重視に片寄ってしまいます。

しかし、登山の楽しみは展望に限らず道端に咲く草花を愛でたり、山や麓の歴史、山名や三角点に興味をもったり、山頂を極める征服感に満足したり、静かな孤独感に浸ったり……、と人によって様々だと思います。こうした山の魅力を多少でも感興できる心を持ち合せている人は本当に幸せだと思います。

万人に共感していただける文章を書くことは本当に難しいと感じますが、本誌が会員配布のみならず書店でも発売されているのを見るにつけ、これからもホットで間違いのない関西の山々の紀行を綴ってゆきたいと思っています。（酒井 賢治）

4月29日から5月2日にかけて、日の出ヶ岳、荒門ヶ岳、高見山、倶留尊山、御在所岳、鎌尾谷と歩いて来た。

荒門ヶ岳は、だいぶ奥まで林道が延びていて、ジープなら、かなり稼げそうだ。

三峰山は道路拡幅中で、歩いても通れず断念した。この工事は時間がかかりそうだった。

倶留尊山は、二本ボソに立派な小屋が建ち、入山料徴収箱が置かれていた。入山料をとられるわりには、小屋は利用できず、トイレもなく、滑り易い所にザイルも無もなくて、ゴミも捨てないのだから、何のメリットもなく、釈然としない思いだ。

車での個人山行。展望よく恵まれたと自己満足。（稲葉 克己）

「六甲山頂が開放されて1等三角点の標石をみることができる」との情報を得て、きっそく訪ねてみた（5月8日）。黒岩谷から登り、七曲りをくだるという最短コースを取る。

山頂にあった大きなパラボラアンテナなど、米軍の通信施設と周囲の金網が撤去されて、芝がはられた台地状になっている。その高みには、まさしく一等三角点の標石。これまでに何度も山頂に登りながら目にすることが出来なかった三角点標を、初めて間近に見た。

山頂が返還された記念にもと、一軒茶屋で六甲山のバッジを購入した。それに刻まれた標高は932・1m。つまり、今の931・3mになる以前のままの高さだった。（安田 憲弘）

四月山行報告

4日西河～山△西川～吉野山（アウトドア教室3月例会下見）

6日今井寺内町～山△鈴鹿山（生駒さらく会 26人参内）

7日山△白川峠（2万5千「河合」）へ。

10日山△村立（同「大和柏木」）へ。

12日「大和渓谷会」例会。吉野山～下市温泉へ。参加18名。

18日「点のつどい」例会。吉野山～山△才谷（同「高野山」）～下市温泉へ。参加21名。

25日県見公民館アウトドア教室「埴形園と歩く」開講式。

27日山△南戸（同「大豆生」）へ。

30日山△城山IV（同「宮野」）へ。（上田 侍弘）

汗をたっぷり流せる温泉と 甲ヶ峰牛のシャブシャブ 日本海の新鮮魚と山の幸
ハイカーの宿 ナガサキロッジ
〒949-21 新潟県中頸城郡妙高高原町池の平温泉
電 0255-86-2261

高山の花、湿原の花 妙高山と火打山 百名山を二つ連れる山小屋
黒沢池ヒュッテ
〒949-21 新潟県中頸城郡妙高高原町池の平温泉 ナガサキロッジ
電 0255-86-2261

休憩室食入浴も歓迎 10名以上マイクロバスで送迎
箱根仙石原温泉 福島館
〒250-05 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原139
電 0460-4-9041

ハイキング・キャンプに！ 鈴鹿国定公園 朝明渓谷 あさけ荘
〒510-12 三重県三重郡菰野町千草
電 0593-93-1789

山行計画

第ハイキングクラブ関係

このページの山行計画には、「会員に限る」と特記してあるほかは会員外の方でも参加できます。一人分つ往復ハガキに記入例によって出発の7日前までに到着するように係あて申し込んでください。「費用」のほかに参加名簿代その他の資料代実費を頂くことがあります。

山行申し込み後参加できなくなった場合は急いで係に連絡してください。体調の悪い方、幼児と飛び入りはお断りします。

例会の参加者全員に傷害保険がかけられています。出発前の際、係に保険料（日額50円、夜行日帰りの場合は2日になり100円）を支出して頂きます。（AIU保険会社と契約）

傷害保険特約内容は次の通りです。

	日額	巨額
死亡・後遺障害保険金	1000万円	
入院保険金	5000円	
通院保険金	2500円	

保険の対象は集合時から解散時まで。事故があった場合は解散時までに係に申し出て下さい。この保険に該当しないものは次の通りです。①ピッケル・6公尺以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行、②スキー使用の山行、③沢・岩・氷雪登はんを目的とした山行、④宿泊場所内の事故。（詳細は係まで）

（記入例）

（往復ハガキを使用）

山行き申込み書

山行

期日

住所 〒

電話番号

氏名

会員番号
（会員でない方は会員外と記入）

生年月日

緊急時の連絡先

返信用ハガキの宛て名欄にご自分の住所氏名を記入してください。

比良

西南稜から武奈ケ岳（中級向き）

期日　7月11日(日)日帰り

集合　京阪出町柳駅8時30分
出町柳駅—坊村—御殿山—西南稜—武奈ケ岳—イブルキのコバ—八雲ケ原—北比良峠—ダケ道—イン谷口—比良駅（縦歩）

コース

費用　約3000円（交通費）

地図　昭文社「46比良山系」

係　◎村田哲俊　○千西信行

申込み　〒610—01城陽市寺田大拝10の10村田まで

伊吹山夜間登山（一般向き）

期日　7月24日(土)～25日(日)
前夜発日帰り

集合　24日JR京都駅三面改札口付近20時30分
京都駅—米原駅（乗り換え）—近江長岡駅—伊吹登山口（ゴンドラかリフト）—三合目—五合目—八合目—伊吹山（往復）

コース

費用　約4000円（交通費）

地図　2万5千—関ヶ原

係　◎中西信行　○西出　寛

日本最高位の高泉（2400M）

立山・室堂平
みくりが池温泉
連絡先
〒930　富山市五福末広町
電　076—41—0434

ハイキングに！　スキーに！
志賀高原　**石の湯ロッジ**
バス　熊の湯線平穏下車
電　0269—34—2421
東京本社・東京都新宿区新宿3—20—5（新光第2ビル）
（株）スポーツサービス
電　03—3341—0211

黒姫山・妙高火打山・飯縄山登山・苗名滝ハイキング
大自然が奏でる四季の詩
日製連　**シャレー黒姫**
〒389—13
長野県上水内郡信濃町黒姫高原
電　02622—55—3371

館内より日本カモシカ近日20頭以上と、北アの雪彩観察、北アの全体の大展望の湯、春は山菜等
展望風呂・露天風呂
あるぷすいん 満山荘
〒382　長野県上高井郡高山村山田牧場・奥山田温泉
電　02622—42—2527

申込み　〒610—01城陽市寺田大拝10の10村田まで
涼しい夜間登山で伊吹山へ。懐中電灯必携。雨天中止（小雨決行）

文学歴史散歩10
大和葛城山から金剛山（一般向）

期日　7月25日(日)日帰り

集合　近鉄御所駅前9時

コース　御所駅—ロープウェイ前—櫻木ノ滝—行者ノ滝—葛城山—水越峠—金剛山—千早登山口—近鉄富田林駅・西條河内長野駅

費用　約2000円（交通費）

地図　2万5千—御所・五條

係　◎松永恵一

申込み　〒580松原正岡2の2の22松永まで

葛城山から金剛山へ。道はよく整備され歩きやすい。雨天中止

北アルプス
爺ヶ岳・針ノ木岳・蓮華岳（中級向き）

期日　8月13日夜発～17日帰着
4泊3日（車中2泊含）

集合　大阪梅田ホテル阪神前21時・京都駅八条口22時

コース　13日大阪・京都—14日扇沢—（柏原新道）—爺ヶ岳—種池山荘(15日山荘)—赤沢岳—針ノ木峠—針ノ木小屋(16日小屋・蓮華岳)—（針ノ木雪渓）—扇沢—17日京都・大阪

費用　約3万5千円

地図　2万5千—黒部湖・雄城
昭文社「3鹿島槍・黒部渓」

係　◎村田智俊　○中西信行

申込み　〒610—01城陽市寺田大拝10の10村田まで
（定員20名、会員に限る）
受付後費用振替で前納送金のこと。剣・立山連峰を見ながら後立山を歩きます。往復共夜行山岳直行バスを使用。雨天決行

鈴鹿・仙ヶ岳（やや健脚向き）

期日　8月22日(日)日帰り

集合　鈴鹿市山本バス停9時（マイカーは小岐須渓谷の奥、大石橋駐車場9時30分）

コース　山本バス停—小岐須山の家—大石橋—御幣林道終点—仙鶴尾根分岐—仙ヶ岳—小社峠—仙鶴尾根分岐—林道終点—大石橋—小岐須渓谷山の家（解散）

費用　50円（保険代）

地図　2万5千—伊船　昭文社「45御在所・鎌ヶ岳」

係　◎新町幸夫　○尾崎英五

申込み　〒519—03鈴鹿市大久保町2065稲垣英夫まで

やせ尾根の仙鶴尾根から仙の石、仙ヶ岳へと歩きます。

京都北山歩き21
桂敷ヶ岳から石仏峠（一般向き）

期日　8月29日(日)日帰り

集合　京都地下鉄北大路駅バスターミナル8時30分

コース　北大路駅（タクシー）岩屋不動—藤助峠—桂敷ヶ岳—祖父谷峠—石仏峠—狼谷—祖父谷林道—岩屋橋—北大路駅（縦歩）

費用　約2000円（交通費）

地図　2万5千—周山
昭文社「47京都北山1」

係　◎村田智俊　○中西信行

申込み　〒610—01城陽市寺田大拝10の10村田まで

あなたのふる里になりたい
スキー場まで歩いて1分
白馬ファミリーペンション
和田森
〒399—93　長野県北安曇郡白馬村八方和田野
電　02651—72—5351

八ヶ岳南麓定の中心地
59年秋新館増築完成全館個室
木の香匂う新浴室露生水豊富
オーレン小屋
1泊2食付き　4500円
4月末～11月末開設
〒391—02　長野市豊平2729　小平　男
電　0266—72—1279

日本唯一の女人禁制の山「大峯山」（百名山）の登山口
船村ヶ岳女人コースもあり
温泉・名水の里
旅館　**紀の国屋甚八**
1泊2食付　7,000円から
〒638—04
奈良県吉野郡天川村洞川
電　07476—4—0309

九州の最高峰・日本百名山
宮之浦岳に一番近い宿
屋久島安房登山口
ホテル　**磯辺荘**
屋久島空港からバス10分
〒891—43　鹿児島県熊毛郡屋久町安房
電　09997—4—6—3021

（改築のため10月末まで休業）

クマザサの残数ヶ岳へ、北山のメインコース。小雨決行

山行報告

新ハイキングクラブ関西

武奈ヶ岳（比良）

2月21日㈰ 曇のち雨

出町柳駅7・30（集合）7・40━坊村8・40〜50━P846 10・30〜45━御殿山11・45〜55━ワサビ峠12・10━口ノ深谷出合12・25（昼食）12・50━中峠13・10━八雲ヶ原分岐14・10〜20━金糞峠14・30━イン谷口16・05━JR比良駅16・35（解散）

雨の予報だったが山は雪だろうと思い決行。ところが山稜は猛烈な風と雨。武奈ヶ岳はあきらめ、ワサビ峠から口ノ深谷に下り、中峠から予定のコースを歩いた。

〔参加者〕稲本芳雄 若松 登
山崎雅治 宮角幸喜 宮坂敏彦
橋本満治 飯田 昇 住山修二
中島義武 深谷正英 大曽根枝子
高岡信男 尾野孝雄 谷口とも子
松林立美 山科邦彦 中井ひろみ
京井 正 呉比裕美 多田正信
多田春子 新井琴代 塚本忠次
日高史緒 仲秋一郎 仲秋豊子
傍田治美 中西 昭 宇高永次郎
山岸智子 瀬尾勇蔵 藤原真理子
櫻畠康一 竹田利夫 米川大穣
○中西信行 ◎村田智俊 計37名

滝又ノ滝から京保山

3月14日㈰ 晴れ

京都駅7・30（集合）7・40発━愛宕道8・55〜9・10━滝又ノ滝9・45〜10・00━余野10・50━ログハウス奥林道終点11・20━東俣山城丹国境稜線12・00（昼食）13・00━米谷峠13・20━殿橋14・30━周山14・50〜15・10発━京都駅16・40（解散）

春の陽気の一日、もうフキノトウが出ていた。

〔参加者〕伊藤和夫 久保田英次
松下 武 坂口良彦 坂口恵子
西村泰治 大角和子 木村 豊
安原弘子 木村 利 京井 正
前田政雄 山高義治 山高多恵子
木本文宮 仲秋一郎 仲秋豊子
新井琴代 飯田 昇 安田文美江
菅沼智隆 太田弘子 水谷美也子
上村 操 竹内正三 宇高永次郎
竹田利夫 田中順子 小島フジ子
内田治幸 北川良子 山高加奈子
中村 清 松林立美 諏訪敏子
櫻畠康一 多田春子 呉山繁三
松田敬子 柴崎裕代 小笠原敏子
諏訪進一 前田幸子 木村恭子
村上映子 山岸智子 山口恵美子
佐藤 栄 呉比裕美 西田小百合
○中西信行 ○村田智俊
◎井上保三 計53名

鷲峰山

3月28日㈰ 雨

京阪宇治駅8・00（集合）8・10発━湯屋谷8・40━茶京明神社8・50〜9・10━鷲峰山1等三角点10・10〜30━金胎寺11・00（昼食）11・40━原山バス停12・30（12・59発→加茂駅）━千手観標14・25〜35━笠置駅16・10

雨のため殆んどの人が和束から帰路についた。上田伸弘氏の三角点解説に耳を傾けた。

〔参加者〕山形泳之 木下道信
小田富也 上田伸弘 中村雅夫
石田 聡 飯田 昇 尾本卓美
尾本芳子 姫路 昭 中井ひろみ
矢代緑子 山岸智子 吉川美智子
木本文宮 呉比裕美 前田幸子
尾野孝雄 竹内正三 宇高永次郎
辻 和子 中村英雄 中村恵美子
安藤八重 太田広子 川崎紀久子
日高史緒 前田政雄 小島フジ子
中西信行 塚本忠次 多田春子
田中玲子 松林立美 西出 寛
木村恭子 林 弘毅 呉山繁三
米川大穣 早野正弘 出口麗子
仲秋一郎 仲秋豊子 新井琴代
伊藤昭三 吉田直二 内田治幸
○村田智俊 ○三谷市男
◎内田昌弘 計50名

廃村八丁

4月11日㈰ 曇時々雨

出町柳駅8・00（集合）8・10発━菅原町9・30〜50━ダンノ峠10・50━刑部滝12・00━廃村八丁12・30（昼食）13・00━ソトバ峠13・45━きぬかけ荘14・20━衣懸坂峠15・15〜30━宮原町16・40━北大路駅18・10━出町柳駅18・20

残雪もあり、心地よい汗を流した。ロングコースだった。

〔参加者〕山高義治 山高多恵子
渡部史朗 瀬尾健治 飯田 昇
三木民子 多原茂春 伊藤和夫
高橋 寛 林 正義 林 悦子
石田和彦 石田輝子 小笠原成峰

在原清美 松下 武 小笠原敏子
坂口良彦 坂口恵子 久保田英次
大角和子 西村泰治 橋本広子
西村由里 京井 正 鈴木春雄
宮坂敏彦 新井琴代 稲田節子
小笠 学 木本文宮 前田政雄
渡辺謙郎 尾野孝雄 山岸智子
巣とも子 仲秋一郎 仲秋豊子
松林立美 呉比裕美 太田欽弥
太田広子 内田治幸 小島フジ子
北川良子 多田春子 中村恵美子
中村英雄 櫻畠康一 深谷正英
日高史緒 西出 寛 西田小百合
林 政三 桜井堅美 桜井真理子
竹田利夫 阿部満彦 水本加津栄
木下和夫 呉山繁三 上井恵美子
前田幸子 ○中西信行◎村田智俊
計65名

北・山ノ辺の道

4月18日㈰ 晴れ

近鉄奈良駅9・00（集合）〜10発━新薬師寺9・55━白毫寺10・10━円照寺11・35〜45━弘仁寺12・45（昼食）1・30━石上神宮2・50〜3・05━長岳寺4・30〜40━JR柳本駅4・55（解散）

名残りの桜、菜の花、椿の朱、石上神宮のショウジョウバカマが楽しく、汗ばむ陽気にらんまんの春を満喫した。

〔参加者〕内山 亨 内山弘子
三木民子 新谷靖子 伊藤かよ子
大畑幸雄 大本久子 伊藤房須香
芝花宗子 根本えり 鎌田美佐枝
昭田 隆 萩尾光春 松下紀史子
和泉満次 村泉規夫 石上マサミ
赤澤千代 早石倫大 米谷よみ子
エバン・ウォルダー 渡辺なよ子
前田泰孝 前田晃宙 西川圭以子
石田輝子 松永めぐみ
○前田旬雄 ◎松永恵一 計29名

鈴鹿・入道ヶ岳

4月18日㈰ 晴れ

小岐須渓谷山の家9・40━池ヶ谷登山口10・05━石門10・35〜40━避難小屋10・45━滝ヶ谷避難路コース分岐11・20━入道ヶ岳12・05（昼食）13・15━二本松尾根・避難小屋13・45━椿神社道分岐13・50━池ヶ谷避難路コース分岐14・35━小岐須渓谷山の家15・10（解散）

ヤブツバキを愛でながら、ミヤマカタバミを踏まないように。賑やかで楽しい山行だった。

〔参加者〕若松 登 若松好子
船田和祥 新田文男 森 芳香子
芥 秀夫 小森忠敬 石田真由美
山本雅子 福島雅介 福島かよ子
山下家也 湯浅以子 竹内正三
西村義明 松林立美 宇高永次郎
新川琴代 中西信行 山高加奈子
辻 和子 田中玲子 水谷美也子
西出 寛 木本文宮 井上恵美子
太田広子 内田治幸 呉比裕美
田中順子 村田智俊 林 弘毅
呉山繁三 永田博美 武田世子
辻原元弘 辻原真弓 森 京子
渡辺昭子 伊藤和恵 稲垣義夫
○新町幸夫◎高畠英五 計43名

新ハイキングクラブ関西

入会のすすめ

あなたも新ハイキングクラブ関西に入会してたのしいお仲間になりませんか。会員には毎号「新ハイキング・別冊関西の山」（年間6号）をお届けします。

入会金 500円（バッジ代）
年会費 2500円（送料共）

新ハイキングクラブ関西への入会申し込みはこの雑誌に挿入の振替用紙をご利用下さい。第何号から送本せよとご明示下さい。

○新入会員紹介（1329まで）

高野裕二 三輪真文 三輪由紀
多賀周二 多賀久子 木村喜久夫
田中貞子 多田昌之 多田馨子
藤井 昇 森本富三 熊谷日出男
石川洋一 松田紀子 前田正樹
竹本一也 緒方敏子 都築重和
関口幸子 大西弘晃 南 正夫
平口孔久 小野沢剣三郎
太田久子 林 森男 野中信代子
澤崎映夫 三宅 明 田殿谷司雄
井上雅博 山中定夫 松尾三重子
井元 昭 米川裕也 早石ゆき子
多賀 貢 阿部晋彦 酒井勝彦
森本欣二 米花洋太 小田晃士
馬場弘行 竹林伸二 竹林美智代
鈴木 明 松本嘉文 井上喜一郎
西尾俊弥 西尾裕子 坂田敏也
廣川政美 笠原末和 青木幸幸
小川正仁 石川康次 山田けいこ
志水 洋 中井 奨 中井美和子
小西鉄和 木村信雄 木村明佐美
原田修策 原田晃子 黒岡征雄
吉岡豊次 岡田 昇 岡田恵美子
小野年昭 川原 禎 川原登美子
内藤大嗣 池田隆一 山岸あさ子
伊藤常男 伊藤かづ 飯田真敏
村井久吉 秋月昭之 秋月美津子
木下和夫 大年雅之 望月健宇
尾崎次朗 大矢照子 奥野宇一
吉原清夫 岡野弘子 山本寿子